

## 安全な水、きれいな水、おいしい水のための活動を募集します。

# 日本水大賞顕彰制度

環境は水の循環とつながり、水資源は人々の暮らしと自然の恵みと深く結びついています。安全な水、きれいな水、おいしい水のために、今年も水循環の健全化をめざす活動を募集します。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成20年7月7日(月)～11月30日(日)

## 第2回 日本水大賞

安全な水、きれいな水、おいしい水のためにあられる21世紀へ、今年も、水循環の健全化をめざす活動を募集します。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成19年7月7日(日)～11月30日(日)

## 第3回 日本水大賞

豊かな自然を育み、多くの生命の循環となる水。水は人と自然が共生して行く上で欠かせない、貴重なものです。今年も水循環の健全化をめざす活動を募集します。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成18年7月7日(日)～11月30日(日)

## 2002年 日本水大賞

豊かな自然を育み、多くの生命の循環となる水。水は人と自然が共生して行く上で欠かせない、貴重なものです。今年も水循環の健全化をめざす活動を募集します。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成13年7月7日(日)～11月30日(日)

## 第5回 日本水大賞 (2003年)

豊かな自然を育み、多くの生命の循環となる水。水は人と自然が共生して行く上で欠かせない、貴重なものです。今年も水循環の健全化をめざす活動を募集します。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成14年7月7日(日)～11月30日(日)

## 第6回 日本水大賞 (2004年)

豊かな自然を育み、多くの生命の循環となる水。水は人と自然が共生して行く上で欠かせない、貴重なものです。今年も水循環の健全化をめざす活動を募集します。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成15年7月7日(月)～11月30日(日)

## 第7回 日本水大賞 (2005年)

豊かな自然を育み、多くの生命の循環となる水。水は人と自然が共生して行く上で欠かせない、貴重なものです。今年も水循環の健全化をめざす活動を募集します。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成16年7月7日(水)～11月30日(火)

## 第8回 日本水大賞

### 2006 日本ストックホルム青少年水大賞

私たちの身近にある水。増えすぎた水、ありますか？

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成17年7月7日(木)～11月30日(水)

## 第9回 日本水大賞

### 2007 日本ストックホルム青少年水大賞

私たちの身近にある水。増えすぎた水、ありますか？

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成18年7月7日(金)～11月30日(木)

## 第10回 日本水大賞

### 2008 日本ストックホルム青少年水大賞

水に関わる研究・活動を募集しています！

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成19年7月7日(土)～11月30日(金)

# 日本水大賞 20回記念誌

## 第11回 日本水大賞

### 2009 日本ストックホルム青少年水大賞

美しい水環境を守る。取組みを募集します

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成20年7月7日(月)～11月30日(日)

## 第12回 日本水大賞

### 2010 日本ストックホルム青少年水大賞

美しい水環境を守る。取組みを募集します

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】平成21年7月7日(水)～11月30日(火)

## 第13回 日本水大賞

### 2011 日本ストックホルム青少年水大賞

美しい水環境を守る。取組みを募集します

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2010年7月7日(日)～11月30日(日)

## 第14回 日本水大賞

### 2012 日本ストックホルム青少年水大賞

美しい水環境を守る。取組みを募集します

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2011年7月7日(水)～11月30日(水)

## 第15回 日本水大賞

### 2013 日本ストックホルム青少年水大賞

美しい水環境を守る。取組みを募集します

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2012年7月7日(土)～11月30日(土)

## 第16回 日本水大賞

この手で、守りたい。

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2014年7月7日(日)～11月30日(日)

## 第17回 日本水大賞

### 17th JAPAN WATER PRIZE

### 2015 日本ストックホルム青少年水大賞

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2014年07.07(日)～10.31(水)

## 第18回 日本水大賞

### 2016 日本ストックホルム青少年水大賞

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2015年7月7日(日)～10.31(日)

## 第19回 日本水大賞

### 2017 ストックホルム青少年水大賞

### 日本代表選考会

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2016年7月7日(日)～10.31(日)

## 第20回 日本水大賞

### 2018 ストックホルム青少年水大賞 日本代表選考会

【対象となる活動内容】  
 1. 水環境の保全・改善活動  
 2. 水質の向上活動  
 3. 水の大切さの啓発活動  
 4. 水の循環の促進活動  
 5. 水の文化の普及活動  
 6. その他、水と関わるあらゆる活動

【募集期間】2017年7月7日(日)～10.31(日)

# 日本水大賞

## 第20回記念誌

### ごあいさつ

日本水大賞20回記念誌発刊に際し、日本水大賞設立準備を含め、今日の規模と内容にまで高める不断の努力をされた多くの関係者に御礼及び感謝を申し上げます。

水循環の健全化を通して、よりよい社会を実現するために、日頃活動している全国の方々が過去20年間にわたり、日本水大賞に応募してくださいました。その総数は20年間で4千件近くにのぼります。しかも、それぞれの事業は継続的に団体あるいは地域ぐるみで長年にわたって続けられていますので、貢献された方々の総数は膨大になります。

水に関する事業は社会の多方面にわたっています。この賞に対する日本国政府からの支援も六つの省にまたがっており、社会的に大きな役割を期待されています。さらに名誉総裁として秋篠宮文仁親王殿下よりご助言を賜り、日本水大賞委員会として非常に光栄に存じます。水にまつわる社会活動は次世代の人材育成事業としても極めて重要です。全国で若い人たちが協力しているばかりでなく、ストックホルム青少年水大賞参加を含め、世界の将来社会へこの事業が貢献できることをうれしく思います。

日本水大賞の20年間は水によって生まれた地球生命の歴史から見ればほんの一瞬かもしれません。しかし、人間活動が急激にグローバル化され変化しているこれまでの20年、そしてこれからの20年は、すべての生命の将来を左右する大きな曲がり角として、地球規模での自然環境に影響を与えます。水循環の健全化を通して、よりよい社会を実現するためにこれまでの活動20年間を一つの区切りとしてこの記念誌を発刊致します。そしてこれを新しい日本水大賞の出発点ととらえ、この事業がますます活発化していくきっかけにできればと思います。委員会としては、新たな発想で地域並びにグローバル両方に貢献できるように、今後も多様でかつ持続的な人類社会へ向けて多くの方々が応募されるように努力を続けてまいります。これを機にこれまで支援されてきた方々に感謝申し上げるとともに、さらに多くの皆様にもご理解いただき、ご支援ご協力をお願い申し上げます。

平成31年3月15日

日本水大賞委員会

委員長 毛利 衛



# 日本水大賞20回記念誌

## 目次

❖日本水大賞20年を振り返って .....	4
日本水大賞委員会 副委員長・日本水大賞審査部会 部会長 虫明 功臣	
❖日本水大賞の創設時を振り返って .....	5
日本水大賞運営本部 副本部長(当時 建設省 河川局 開発課 建設専門官) 細見 寛	
❖日本水大賞 大賞 歴代受賞者一覧 .....	6
❖日本水大賞 大賞受賞時の評価内容について .....	7
❖日本水大賞 大賞受賞団体 その後の活動について .....	11
❖日本水大賞 各賞 歴代受賞者一覧① .....	38
国土交通大臣賞、環境大臣賞、厚生労働大臣賞、農林水産大臣賞	
❖日本水大賞 各賞 歴代受賞者一覧② .....	39
文部科学大臣賞、経済産業大臣賞、市民活動賞、国際貢献賞	
❖日本水大賞 各賞 歴代受賞者一覧③ .....	40
奨励賞、未来開拓賞、審査部会特別賞	
❖日本水大賞20回を振り返り 分析① .....	41
大賞受賞者のその後の活動からみえる日本水大賞が及ぼした効果とこれからの課題	
❖日本水大賞20回を振り返り 分析② .....	42
応募件数の推移と活動分野の傾向	
❖日本水大賞20回を振り返り 分析③ .....	43
応募の地域分布と大賞受賞者の地域分布	
❖日本水大賞委員会 歴代委員 任期一覧 .....	44
❖日本ストックホルム青少年水大賞(SJWP)これまでの歩み .....	46
日本ストックホルム青少年水大賞審査部会 部会長 谷田 一三	
❖日本ストックホルム青少年水大賞 歴代受賞校一覧 .....	47
❖ストックホルム青少年水大賞(国際コンテスト) .....	48
過去大会の日本代表校と受賞国一覧	

# 日本水大賞20年を振り返って

日本水大賞委員会 副委員長  
日本水大賞審査部会 部会長  
虫明 功臣

日本水大賞は、平成9（1997）年、治水と利水に加え河川環境整備を目的に加え、さらに、河川整備に一般住民の意見を反映させることを規定した河川法の大改正を契機として、平成10年度に創設されました。当時は各方面で、21世紀を目前にして来るべき新世紀の形を展望する議論が盛り上がっていました。水関連行政分野では、それぞれが持つ水問題の更なる解決には住民・民間主体、地域主体の取組みが不可欠であるとの認識が高まるとともに、「健全な水循環系の構築」が共通の政策フレーズとなっていました。そうした中で日本水大賞は、「水循環系の健全化」をキーワードとして、発足し、平成11年3月の第1回表彰式では、大賞の他、建設大臣賞（現国土交通大臣賞）と国務大臣環境庁長官賞（現環境大臣賞）の2省庁の大臣賞から始まりました。その後、平成13（2001）年に厚生労働大臣賞、平成16（2004）年に農林水産大臣賞、文部科学大臣賞、そして平成18（2006）年に経済産業大臣賞が順次創設され、6省庁が連携する表彰制度となりました。

平成13年に高校生を対象とした日本ストックホルム青少年水大賞審査部会が日本水大賞委員会に併設され、平成17（2005）年には名誉総裁として秋篠宮殿下をお迎えして、現在に至っています。

筆者は、発足以来賞の選考に関わってきましたが、20年間毎年、地域に根ざしたユニークな活動、志と熱意に満ちた活動、楽しく参加できて継続できるよう工夫した活動、地道に継続し成果を挙げている活動、など、全国各地から多種・多様な水に係わる取組みからの応募に接して、心を打たれ勇気づけられてきました。今回行ったグランプリ受賞者からのアンケート結果を見ても、住民・民間主体、地域主体の取組みを重視し顕彰するという日本水大賞の目論見は達成されていると確信できます。また、取組みは20年の時の流れの中でより厚みが増し広がりを持って、現代の新たな人と水の係わりが築かれていることを実感しています。日本水大賞が、次の10年、20年に向けてさらにそのプレゼンスを高めるよう発展することを祈念します。

# 日本水大賞の創設時を振り返って

日本水大賞運営本部 副本部長  
(創設当時 建設省 河川局 開発課 建設専門官)  
細見 寛

私は、平成10(1998)年、建設省河川局河川開発課に在籍時、カナダモントリオールで開催された国際水資源学会(IWRA)に参加した。そこで、高橋裕東京大学教授にバッタリ会った。このときにIWRAは、世界水会議(WWC)に参加することが決められた。

次に、スウェーデンのストックホルムで開催されたGWP(グローバルウォーター)の水賞授賞式に参加した。

当時、国内では、ダム建設が社会的関心を集め、ダム建設の批判派と推進派がせめぎ合っていた。ダム事業を推進するにあたって、中止・休止・足踏みの3段階に分け、不要不急のダム事業を中止する仕組みを導入していた時期であった。

国内の状況しか知らなかった私は、二度の海外出張で、世界で論じられている水問題とその解決に向けた取り組みを知り、日本においても、同様の取り組みを始めないと、国際的な孤立を招くと、非常な危機感を覚えた。

そこで、読売新聞の記者だった岡島成行氏、WWFジャパンの事務局に在籍していた平林泰雄氏の知遇を得て、関係する省や諸機関等との調整に走り回った。そして、高橋裕東京大学名誉教授(専門は河川工学など)を委員長、中川志郎茨城県自然博物館館長を副委員長、川那部浩哉京都大学名誉教授(専門は淡水生物生態学など)、老川祥一読売新聞社取締役編集局長らを委員とする日本水大賞顕彰制度委員会が立ち上がった。

この委員会において、日本水大賞の制度が検討され決定される。そして事務局となった日本河川協会の紀陸富信専務理事のもと、第1回目の募集が始まり、審査部会の評価を経て、表彰式が、秋篠宮同妃両殿下に列席を賜り、北の丸公園にある科学技術館において開催された。

各賞の表彰状には、「水循環の健全化」に貢献したと記されているが、この概念は、水循環基本法に受け継がれている。つまり、日本水大賞は、素晴らしい活動を表彰することによって、ダム問題、水道民営化問題等で激化する社会対立を昇華し、新しい水との付き合い方の指針を示していったと考えられる。

以来、活躍してくださっている団体や個人の皆様方の熱意、事務局のご努力に支えられ、日本水大賞の表彰が継続され、20回目を迎えられた。人口減少、都市や地方の再生等、水循環を巡る新しい課題も出てきた。今までの活動が継承されていくとともに、新しい課題解決に向けた諸活動も興っていただきたいと思います。

# 日本水大賞 大賞 歴代受賞者

回	応募数	活動の名称	都道府県	活動主体	表彰式（開催日／会場）
第1回 (1999年)	251件	水質浄化運動 30年の闘いー矢作川で生まれた流域管理ー矢作川方式ー	愛知県	矢作川沿岸水質保全対策協議会	平成11年3月22日 科学技術館 サイエンスホール
第2回 (2000年)	228件	世界最初のトンボ保護区づくり	高知県	社団法人トンボと自然を考える会	平成12年6月20日 科学技術館 サイエンスホール
第3回 (2001年)	219件	「雨水浸透事業」を通じて推進する市民・企業・行政のパートナーシップ	東京都	東京都小金井市（市民・父ちゃん母ちゃんの水道屋さんたち・行政）	平成13年5月30日 科学技術館 サイエンスホール
第4回 (2002年)	236件	革新的雨水プロジェクト	東京都	雨水利用を進める全国市民の会	平成14年5月30日 科学技術館 サイエンスホール
第5回 (2003年)	266件	稀少淡水魚「ムサシトミヨ」の保護と生息河川の環境保全活動	埼玉県	熊谷市ムサシトミヨをまもる会（連携団体 埼玉県熊谷市立久下小学校エコクラブ）	平成15年6月17日 科学技術館 サイエンスホール
第6回 (2004年)	201件	宮古島の命の源である地下水を硝酸態窒素の汚染から守る保全活動	沖縄県	沖縄県立宮古農林高等学校 環境工学科 環境班	平成16年6月3日 科学技術館 サイエンスホール
第7回 (2005年)	238件	見えなくなった身近な水環境を見えるようにする社会的仕組みの試みー「近い水」にー	滋賀県	水と文化研究会	平成17年6月3日 国際連合大学 ウ・タント国際会議場
第8回 (2006年)	159件	農業水路への設置を目的とした小規模水田魚道の開発による環境保全活動	福井県	福井県立福井農林高等学校 環境土木部	平成18年5月30日 国際連合大学 ウ・タント国際会議場
		農業水路に生きものの賑わいを取り戻す地域づくり		足羽川堰堤土地改良区連合	
第9回 (2007年)	160件	静かなる侵入者 外来種 タイワンシジミから考え、行動する水辺の環境保全活動	神奈川県	向上高等学校 生物部	平成19年6月1日 国際連合大学 ウ・タント国際会議場
第10回 (2008年)	145件	ふるさとの水循環系と水文化の一体的な保全活動	熊本県	熊本市	平成20年6月12日 東京国立博物館 平成館
第11回 (2009年)	76件	メダカの生態学的研究と啓発活動の継続ー環境問題の今日的課題へのアプローチー	山口県	山口県立厚狭高等学校 生物部	平成21年6月30日 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟
第12回 (2010年)	154件	里山のため池及び湿地環境における、植生と侵略的外来種管理による生物多様性の修復・保全活動	茨城県	特定非営利活動法人 穴塚の自然と歴史の会	平成22年7月1日 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟
第13回 (2011年)	157件	水辺に人が集まるまちづくりー吉野川をはさんだ水際交流拡大プロジェクトー	徳島県	特定非営利活動法人 新町川を守る会	平成23年6月21日 日本科学未来館 みらいCANホール
第14回 (2012年)	176件	東日本大震災への緊急対応ー良好な水環境と災害に強い柔軟な簡易トイレシステムの構築のためにー	滋賀県	トイレの未来を考える会	平成24年6月26日 日本科学未来館 みらいCANホール
第15回 (2013年)	185件	津波により水利が崩壊している地域での農作物栽培	宮城県	マイファーム亘理協同組合	平成25年7月2日 日本科学未来館 みらいCANホール
第16回 (2014年)	171件	水と闘い半世紀 新たな時代の水防団ー次世代を担う若年層へ水防の継承ー	岐阜県	岐阜市水防協会	平成26年6月17日 日本科学未来館 未来館ホール
第17回 (2015年)	133件	地形特性を反映した津波模型による疑似津波の実演活動ー津波防災への啓発活動と津波模型製作の継承ー	岩手県	岩手県立宮古工業高等学校 機械科 課題研究 津波模型班	平成27年7月7日 日本科学未来館 未来館ホール
第18回 (2016年)	151件	恵みに感謝し緩やかな連携で豊かな流域をー筑後川流域連携推進事業	福岡県	特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部	平成28年6月21日 日本科学未来館 未来館ホール
第19回 (2017年)	136件	創作劇「とこしま堰物語」の公演活動ー地域の資源（筑後川）を活かした教育活動ー	福岡県	久留米市立金島小学校	平成29年7月11日 日本科学未来館 未来館ホール
第20回 (2018年)	143件	次世代を担う子どもが安全に楽しく川の恵みを受用できる社会の推進	東京都	特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会	平成30年6月26日 日本科学未来館 未来館ホール

※活動主体は、受賞当時の名称

# 日本水大賞 大賞受賞時の評価内容について

## 第1回日本水大賞受賞

団体（水環境）

活動の名称 「水質浄化運動30年の闘い－矢作川で生まれた流域管理－矢作川方式－」  
活動主体の名称 矢作川沿岸水質保全対策協議会（愛知県）

環境関連の法制度が整備される昭和45年以前に設立された本協議会は、環境保全を目的とする団体としては、先駆的な存在である。河川の水質汚濁の防止を目的として、流域内の自治体や河川利用団体が参加する協議会を結成した取り組みは、水資源の流域管理の手本となるものである。大規模開発に対して段階毎に協議して事業の合意形成を図る方式は、今後の住民参加の手法として示唆に富むものであることから高い評価を得た。

## 第2回日本水大賞受賞

団体（水環境）

活動の名称 「世界最初のトンボ保護区づくり」  
活動主体の名称 社団法人 トンボと自然を考える会（高知県）

すでに著名になった具体的な成果もさることながら、水と生物の関わり・生物と環境の関わりを「トンボ」というごく普通の生き物の生態を通して明らかにした点で高く評価されたものである。因みに”トンボと自然を考える”という波は今や全国規模の広がりを見せている。

## 第3回日本水大賞受賞

行政（水環境）

活動の名称 「雨水浸透事業」を通じて推進する市民・企業・行政のパートナーシップ」  
活動主体の名称 東京都小金井市(市民・父ちゃん母ちゃんの水道屋さんたち・行政)（東京都）

この事業は雨水浸透マスの普及率日本一の成果もさることながら、事業を通じて市民、水道屋さん、行政が水問題に積極的に取り組み、長い年月にわたり水環境改善に全市を挙げて努力している姿勢が高い評価を受けたものである。

## 第4回日本水大賞受賞

団体（水防災・水資源・水環境・水文化）

活動の名称 「革新的雨水プロジェクト」  
活動主体の名称 雨水利用を進める全国市民の会（東京都）

「雨水を流すのではなく溜めて浸透させる、雨水を捨てるのではなく有効に利用する」という素朴な疑問から始まったこのプロジェクトは、雨水辞典の発行や雨水資料館活動、雨水技術を用いた国際協力等、単なる雨水利用の枠を越えて取り組む総合的なアイデアと実行力が評価されたものである。

## 第5回日本水大賞受賞

団体（水環境）

活動の名称 「稀少淡水魚「ムサシトミヨ」の保護と生息河川の環境保全活動」  
活動主体の名称 熊谷市ムサシトミヨをまもる会(連携団体 埼玉県熊谷市立久下小学校エコクラブ) (埼玉県)

世界中で埼玉県の熊谷にしか生存しない稀少淡水魚である「ムサシトミヨ」を守ることに成功している。この活動では、「まもる会」による生息河川環境の保全活動と「ムサシトミヨ」の人工飼育で連携する久下小学校の活動が高く評価されたものである。

## 第6回日本水大賞受賞

学校（水資源・水環境）

活動の名称 「宮古島の命の源である地下水を硝酸態窒素の汚染から守る保全活動」  
活動主体の名称 沖縄県立宮古農林高等学校 環境工学科 環境班（沖縄県）

宮古島という限られた地下水資源の保全に立ち向かい、肥料によって引き起こされる地下水汚染から水資源をどう守り、利用するか、という世界各地に共通する悩みを解決した意味は大きい。宮古島における本活動は、問題解決型研究としてレベルの高い成功例として高く評価された。

## 第7回日本水大賞受賞

団体（水防災・水環境・水文化）

活動の名称	「見えなくなった身近な水環境を見えるようにする社会的仕組みの試み －「遠い水」を「近い水」に－
活動主体の名称	水と文化研究会（滋賀県）

琵琶湖周辺の地域住民と研究者が行っている15年にわたる活動である。10年間で3,400人以上が参加した人びととホタルの関わりの変容を追跡した「ホタルダス」や昭和30年代までさかのぼり水利用と排水の仕組み、水の自主管理組織としての地域自治組織の役割を綿密に調査した「水環境カルテ」を中心に国内外に向けた多彩な活動など地域住民の関心、参加を促す工夫と努力が高く評価された。

## 第8回日本水大賞受賞

学校（水環境）・団体（水環境）

活動の名称	「農業水路への設置を目的とした小規模水田魚道の開発による環境保全活動」
活動主体の名称	福井県立福井農林高等学校 環境土木部（福井県）
活動の名称	「農業水路に生きものの賑わいを取り戻す地域づくり」
活動主体の名称	足羽川堰堤土地改良区連合（福井県）

同じフィールドで、互いに連携し、水田と河川の生態系ネットワークの復活を目指して、管内の小学校、市民団体とも協力しながら、生態調査、ビオトープの造成、農業水路や水田での魚の復元などの活動が豊かな田園地域づくりに実績を上げている点が高く評価された。

## 第9回日本水大賞受賞

学校（水環境）

活動の名称	「静かなる侵入者 外来種タイワンシジミから考え、行動する水辺の環境保全活動」
活動主体の名称	向上高等学校 生物部（神奈川県）

それまで在来種マシジミと同定されていた可能性のある外来種タイワンシジミを1999年に学校近くの水路で確認して以来、相模川全流域におけるシジミ類の分布調査を実施し、タイワンシジミが広く分布している一方で、在来種マシジミが絶滅の危機にあること、ならびにタイワンシジミの拡大の原因を突き止めたことが、貴重な科学的業績である。専門家等と協力して「全国シジミネットワーク」を構築し、情報を収集し発信するなど社会的活動としても高く評価された。

## 第10回日本水大賞受賞

行政（水資源・水環境・水文化）

活動の名称	「ふるさとの水循環系と水文化の一体的な保全活動」
活動主体の名称	熊本市（熊本県）

地下水を中心とする地域独特の水循環系と水に係りが深い歴史や風習などの水文化を結び付けて、保全・普及・啓発し、近隣の町との地下水保全協定による生産調整水田を利用した地下水涵養事業や上流町村との森林整備協定に基づく水源涵養林の整備事業など地道でユニークな市当局の先導的活動が、高く評価された。

## 第11回日本水大賞受賞

学校（水環境）

活動の名称	「メダカの生態学的研究と啓発活動の継続 －環境問題の今日的課題へのアプローチ－
活動主体の名称	山口県立厚狭高等学校 生物部（山口県）

13年間の長期間にわたり、メダカの生態学的かつ高度な研究を継続してきたことが成果につながっている。特定外来種カダヤシとの種間関係や放流されたヒメダカによる野生メダカの遺伝子汚染の実態解明など、メダカの生態に関する新たな科学的知見を加えたこと、また、生き物を安易に野外に放流することによる「遺伝子汚染」への警鐘など、適正な自然保護のあり方について啓発活動を行っていることも高い評価を得た。

## 第12回日本水大賞受賞

団体（水環境）

活動の名称	「里山のため池及び湿地環境における、植生と侵略的外来種管理による生物多様性の修復・保全活動」
活動主体の名称	特定非営利活動法人 宍塚の自然と歴史の会（茨城県）

歴史的遺産の里山を守るため、植生管理・外来種駆除・下草刈り・調査・環境教育など多岐にわたり、かつ20年にも及ぶ地道な保全活動を展開している。里山と湿地・谷津田とため池を一体のシステムと捉えた、地域環境保全・修復の優れた実践活動として高い評価を得た。

## 第13回日本水大賞受賞

団体（水資源・水環境・水文化）

活動の名称	「水辺に人が集まるまちづくり ～吉野川をはさんだ水際交流拡大プロジェクト～」
活動主体の名称	特定非営利活動法人 新町川を守る会（徳島県）

「川を活かした町づくり」として第3回日本水大賞国土交通大臣賞を受賞してから10年、産官学民さまざまな組織と連携・協働を深めながら活発な活動を展開している。住民が主体となって行政や企業を巻き込むというユニークで多彩な活動は、“河川環境の再生とそれを中心とした街おこし、地域おこし”の模範として高く評価された。

## 第14回日本水大賞受賞

学校（水防災・水環境）

活動の名称	「東日本大震災への緊急対応 ～良好な水環境と災害に強い柔軟な簡易トイレシステムの構築のために～」
活動主体の名称	トイレの未来を考える会（滋賀県）

東日本大震災後の上下水道が機能しない中で、「非常時でも人間の尊厳を守る排泄空間の構築」を目指して急遽結成したこのグループは、ポータブル型の水を使わないし尿分離トイレを独自に設計・開発するとともに被災地の避難所、仮設住宅、老人介護施設などにいち早く導入して、衛生的で心地よい排泄環境整備に大いに貢献した。この活動は、衛生・水環境分野における素晴らしい復旧・復興支援として高く評価された。

## 第15回日本水大賞受賞

企業（復興支援）

活動の名称	「津波により水利が崩壊している地域での農作物栽培」
活動主体の名称	マイファーム亘理協同組合（宮城県）

イチゴ栽培で東北一の出荷を誇っていた亘理町沿岸部の農業地帯では、東日本大震災での津波によって農業水利施設やイチゴハウスは全壊、農地はすぐには回復が困難だと言われる塩害を受けた。この苦境下で、震災直後から次世代へつなげる新しい形の農業復興モデルに挑戦し、一年後には農事組合法人を設立して、夏には塩分に強いトマトの栽培を、秋冬にはダイコンとハクサイの栽培を成功させた。被災地農業者が主導する農業復興のトップランナーとしての逞しい取り組みが高く評価された。

## 第16回日本水大賞受賞

行政（水防災）

活動の名称	「水と闘い半世紀 新たな時代の水防団 ～次世代を担う若年層へ水防の継承～」
活動主体の名称	岐阜市水防協会（岐阜県）

近年、大規模な水害を被っていない中、水害の記憶の風化と「自助」、「共助」による自衛意識が希薄になることへの対策として、地域の小中学生を対象に過去の大水害の記録を語り継ぎ、水防演習においては中高生に水防工法の伝統技術を体験的に伝承する活動を始めた。次世代に水防活動の意義と具体的方法を伝えて地域防災力の向上と継続性を維持しようとするこの新たな取り組みは、全国の模範として高く評価された。

## 第17回日本水大賞受賞

学校（水防災）

活動の名称	「地形特性を反映した津波模型による疑似津波の実演活動」
活動主体の名称	岩手県立宮古工業高等学校 機械科 課題研究 津波模型班（岩手県）

古来より度々甚大な津波災害を被ってきた三陸地域においてその恐ろしさを風化させないため、平成17年から地形特性を反映した造波装置付きの「津波模型」を製作し、地域住民や小中学校へ実演会を開催して津波への備えを促してきた。実演会を開催した15校の小中学校では、東日本大震災において登校していた生徒全員が無事であった。この経験を生かし、南海トラフ地震で被害が想定されている関西方面の府県でも実演するなど、津波防災意識の喚起および地域防災力を向上させる取り組みが高く評価された。

## 第18回日本水大賞受賞

団体（水防災・水環境・水文化）

活動の名称	「恵みに感謝し緩やかな連携で豊かな流域を～筑後川流域連携推進事業」
活動主体の名称	特定非営利活動法人筑後川流域連携倶楽部（福岡県）

筑後川流域内の環境保全や地域おこしなどに係る個人や団体が、県境や市町村境を越えた流域の視点で交流・連携を深めることが、安全で活力のある流域づくりに繋がると言う理念のもと、筑後川流域をテーマパークとして捉え、「遊び」、「学び」、「仕事」が一体化した創造的活動の舞台となるよう多彩な活動を20年にわたり展開し、流域の自然的・歴史的・社会経済的な結びつきを取り戻した。市民主導で行う流域連携の模範として高い評価を得た。

## 第19回日本水大賞受賞

学校（水資源・水文化）

活動の名称	「創作劇「とこしま堰物語」の公演活動 ～地域の資源（筑後川）を活かした教育活動～」
活動主体の名称	久留米市立金島小学校（福岡県）

近くを流れる筑後川に約300年前、5人の庄屋が立ち上がり私財、身命を賭して床島堰・床島用水を築造し、旱害に悩んでいたこの地域を豊穡の地に変えた。金島小学校では、この先人の偉業を教材として、ここ20年創作劇「とこしま堰物語」に収斂するユニークで素晴らしい活動を展開している。子供たちに水の尊さ、有難さ、大切さについて体得させるとともに、地域のアイデンティティと誇りそして郷土愛を育む、この取り組みは、水に係る地域教育活動の模範として高く評価された。

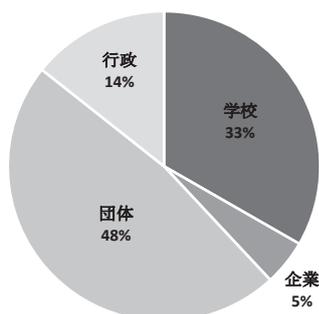
## 第20回日本水大賞受賞

団体（水防災・水資源・水環境・水文化・復興支援）

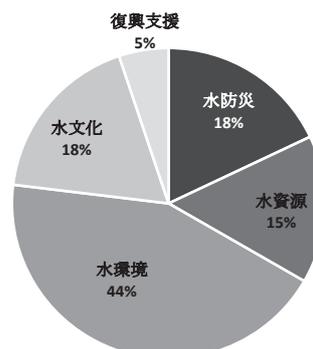
活動の名称	「次世代を担う子どもが安全に楽しく川の恵みを楽しむ社会の推進」
活動主体の名称	特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会（東京都）

川での安全な活動を指導できる人材養成に関する我が国初のシステムを確立し、これまでに約6,500人という多数の指導者を養成している。また、ライフジャケット着用の普及を進めて川の安全利用の促進や水難事故防止に実績を上げるとともに、学校と連携した川に学ぶ多様なリーダーの育成と防災教育の実施など、子どもたちを対象に多くの体験的な学びの機会を提供している。継続的・発展的に長年行われてきたこの活動は、人と川との関わりを再構築する取り組みとして高く評価された。

大賞受賞者の活動主体



大賞受賞者の活動分野



# 日本水大賞 大賞受賞団体の その後の活動について

第20回を機に、過去の日本水大賞大賞受賞団体へ当時の活動や水循環系の健全化に関する諸活動をめぐる社会状況、その後の活動状況や直面した課題とその解決に向けた取り組みなどについてアンケート調査を行いました。

日本水大賞受賞がその後の活動に及ぼした影響や社会にどのような効果をもたらしたかを分析し、水循環系の健全化に関する諸活動が広く国民の理解と関心を深め、活動の継続ならびに河川の維持・環境の保全等に関する活動の活性化の一助となれば幸いです。

---

## 日本水大賞大賞受賞団体に行ったアンケート項目

- ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について
  - ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について
  - ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組みについて
  - ④ 日本水大賞受賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか
  - ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞へのご意見など）
-

# 第1回 日本水大賞 (1999年)

## 水質浄化運動30年の闘い

～矢作川で生まれた流域管理～ 矢作川方式

矢作川沿岸水質保全対策協議会

### ① 受賞当時の活動内容

#### 流域全体で水質保全に取り組む仕組みづくりの確立と長年の活動

矢作川（利水域を含む水域・湖沼・沿岸海域）の水質汚濁の防止を目的とした「矢作川方式」による水環境保全活動。活動の支柱は、水質基準整備の促進、原因者への順法的措置・啓発、河川・海域の汚濁予防・抑制の啓発である。この中で、流域内の一定規模以上の開発行為（土石採取、造成・建設関係）及び工場等排水放流に対しては事前協議で同意を条件とし、計画・施工・実施・供用の各段階で指揮・監視等を行っている。また、「流域は一つ、運命共同体」を合言葉に上下流交流・環境教育を発展的に構築し、流域の共存意識・協調体制に繋げている。

### ② 受賞当時の諸活動を巡る社会状況

#### 高度経済成長につづく流域の乱開発で水質の汚濁が危惧されていた

矢作川流域は、長野・岐阜・愛知3県に及ぶ。上流は、人工林率が高い林業・水源林地域である。下流は、工業と農業が共存し、自動車工業を中心とする都市化・人口増加が著しい地域である。矢作川の水は、農業用水・工業用水・上水道用水と複合して利用され、最終的に沿岸漁業、アサリ・ノリ養殖が盛んな三河湾に注いでいる。山地は花崗岩類のマサ地帯で、保水力がある反面、大雨に脆弱である。高度経済成長期から、上流の丘陵・山地は窯業原料・山砂利の採取が乱立した。その上、自動車関連の工業の勢いで過疎化対策、土地利用転換の林地開発・利益優先の企業進出が続いた。上流の乱開発による泥濁水、工場・生活排水増加による水質汚濁の影響が下流及び沿岸の農地・漁場に及び、生産被害が拡大した。

オイルショック以降、法的整備と当会主導の矢作川方式による活動により、乱開発行為や工場排水等の垂れ流し状態が規制・改善され、矢作川の水質汚濁状態が徐々に解消した。

当会が受賞時にも工場・道路・都市施設への土地転換が更に進行し、ゴルフ場等の農薬使用量の増加、土石採取跡等への産業廃棄物の投棄・焼却による水質汚染も危惧された。沿岸漁場では泥濁水の被害が減少したが、漁業者らは更に、水産資源の安全性確保、発生する赤潮・苦潮が早く解消され生産量が向上することを望んでいた。

### ③ 受賞後の活動実績、課題と解決に向けた取り組み

#### 矢作川に清流が戻り、上下流で交流振興を図り水源林の保全に取り組む

矢作川方式で、排水放流規制と開発行為の秩序が整備され、矢作川に清流が戻り、矢作川を流域全体で守る協調体制が築かれた。また、上流の水源林保全に下流の都市が協力し、企業・団体の取組み・交流振興も推進された。当会は水大賞受賞後も矢作川方式で関係河川・湖沼・海域の汚濁防止の取組みを一貫して継続している。平成11～29年度の開発行為（土石採取関係、造成・建設関係）及び工場等排水放流の協議実績は、平均319件／年（最小215～最大403件／年）である。山村部は、都市部の人口増加に対し、林業の低迷と少子高齢化が複合し森林整備の遅れ（人工林手入れ不足）が拡大した。この解決に山村部から都市部に支援要請があり、本会は現状調査と支援・協力手法の検討を行った。平成12年に東海（恵南）豪雨が発生し、上流の復旧工事に汚濁防止対策を要請し、指導に努めた。

バブル崩壊後の低調経済時も自動車関連産業は堅調で推移し、愛知県内で愛知万博の開催、中部国際空港建設、住宅地・工場用地造成が続いた。山地の新規用地造成では、自然由来の酸性岩が水質汚染要因に加わり、当会は調査と保全対策を要請・指導した。伊勢湾岸・東海環状自動車専用道建設ルートに係る投棄産廃の処分、埋立処分場の整備や工場・施設を取壊しに伴う水質汚染・土壌汚染対策等の指導にも努めた。リーマンショック後、生物多様性条約締約国会議（COP10）が愛知県・名古屋市で開催された時期も、矢作川流域で開発行為が続いた。中でも山地を貫く新東名高速道路建設工事は長期に亘り、当会は切土・掘削で産出する自然由来の酸性岩・重金属類の水質汚染予防の対策と管理（調査・監視）を段階的に要請・指導を続けた。

現在も本会は大規模開発事業はじめ各種協議案件の指導等を行っているが、順調に生産されていたアサリが平成28年から急激に減産し、要因の究明、海域・湖沼・ダム湖の水質保全及び管理促進を関係機関に要請している。

#### ④受賞は、その後の活動にどのような影響を及ぼしたか

### 会の理念「矢作川方式」の浸透と支援体制の確立及び啓発図書の発行等を展開

水大賞「グランプリ」の受賞は当会の活動理念と運営方針が会員によく浸透する機会となり、支援体制を強化した。また「矢作川方式」による開発事業への段階的協議、施工中の仮設防災・汚濁防止保全対策、環境管理等の技法への理解が、愛知県を中心に行政関係機関及び実務関係者に広がった。愛・地球博（愛知万博）会場の建設・整備に矢作川方式の技術・ソフトが積極的に採用されたこともその一例である。また、国土交通省の矢作川流域圏の取組みの中でも紹介されている。

更に、支援団体の指導に寄与し、矢作川方式の解説、開発・工事中の対策の経験則と標準的工法及び実践事例、森林資源・木材の循環利用システム等を紹介した啓発図書や実務担当者向け手引書の執筆・編集・監修を行った。これらの書籍は流域を超え、矢作川方式による汚濁防止対策技術が濁水対策を課題とする地方の支援・啓発に波及した。一部は国際協力による本邦研修の補助教材にも提供している。

#### ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など）

### 50年の経験をもとに、持続可能な流域圏を目指し活動をつづける

当会は、設立50周年を迎えた今も流域の協調体制を保持し、経験を大切に知恵と工夫を結集して設立当初から一貫した運動を展開している。水利用が高度化した矢作川流域は、製造品出荷額日本一を続ける地域であり、矢作川の清流を守るための課題は尽きない。そして、人口減少社会化と地域環境問題・気候変動の影響を見据えた汚濁防止対策の取組み、持続可能な流域圏（水の恵みを保持する姿、自然共生）への寄与に挑み続けている。



ゴルフ場造成工事による河川汚濁  
長野県根羽村 昭和49(1974)年



愛知県知事に矢作川の  
水質汚濁防止の陳情  
愛知県庁前デモ（昭和46年9月2日）



昭和53年から開始している山の子ら  
潮干狩り招待  
上下流交流・環境事業  
（平成17年5月24日）



内藤連三元事務局長  
監修・共著  
「濁水に挑むPart II」  
中日出版社、1999

## 第2回 日本水大賞 (2000年)

### 世界最初のトンボ保護区づくり

社団法人 トンボと自然を考える会(当時)

(現在) 公益社団法人 トンボと自然を考える会

#### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容

##### ナショナルトラストによる用地確保とトンボ博物館の展開

中村市(現・四万十市)田黒 池田谷(総面積約50ヘクタール)をトンボ保護区とすべく、ナショナルトラストによって用地確保と整備を図ると共に、1990年に中村市立として谷入り口に建設されたトンボの博物館「四万十とんぼ自然館」の展示を通し、トンボおよびその生息地を守る意義を伝える活動を精力的に行っていた。

#### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況

##### トンボ及びその生息環境保全に対する関心の低下と宅地開発による自然環境の悪化が進行していた

トンボと親しんだ世代の高齢化に伴い、社会のトンボ及びその生息環境保全に対する関心が低下、当中村市(現・四万十市)トンボ自然公園の見学者も減少一途となっていた。さらに、当保護区への社会的評価が高かった1990年代に急進した、周囲の宅地開発による自然環境の悪化が顕著になっており、とりわけ、谷入り口に出現した宅地の動向が、本保護区の将来を脅かしていた。このため、本会が事務局となり、市内主要団体・組織(約40団体)によるトンボ王国建設促進委員会を結成し、公共事業による施設整備を図る中で当該宅地を保護区に取り込めるよう企画作りを急いでいた。

#### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組み

##### 自治体、一口オーナー(個人)、地権者の協力で保護区を確保

トンボ自然公園の社会的認知度が高まり、見学者が増加してくると共に、一部の賃貸借保護区の地権者より強硬な買い取り要求または借地料アップを求められるようになってきた。このため、県議の協力を得て高知県にも購入費の支援を要請、2002年から2003年にかけて、本会所有の約12ヘクタールの借地保護区を中村市(現・四万十市)に買い上げて頂いた。

また、民間による開発によって山肌が削り取られた四万十とんぼ自然館横の雑種地には、トンボ王国建設促進委員会の提案による淡水・汽水魚の飼育展示館(さかな館)が建設されることとなり、2002年にとんぼ自然館と併せ「四万十川学遊館」としてリニューアル・オープンしている。

さらに、谷入り口に出現した宅地については本会による指定寄付募集(一口オーナー)により2003年から2004年にかけて、その一部を買い取り、2017年には地権者のご好意によって残り用地の大半を本会に寄贈して頂いた。

#### ④ 日本水大賞受賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか

##### 活動に対する信頼度の向上と活動の活性化に大きく寄与した

当時、活動中のトンボ王国建設促進委員会メンバーに対する本会信頼度向上によって、その後の協議が活性化した。また、高知県および中村市(現・四万十市)といった公共自治体や、新聞社やテレビ局などの報道機関に対しても、本会を支援する上での安心感を与えるところとなり、環境保全を前提とする新展示施設(さかな館)建設への弾みになったものと考えている。

## ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など）

子供たちの昆虫離れを憂いと同時に水環境保全への啓発など、日本水大賞が果たす役割は年々重要度を増してきていると思う

温暖化の影響と推察される降雨形態の変化に加え、中・山間地の疲弊に端を発する水系の保水機能低下などにより、少なくない日本各地の著名なトンボ生息地が自然放置によって輝きを失っている中、当四万十市トンボ自然公園では人手による積極的な整備と管理（保全）作業の継続により、保護区内のトンボ記録種は1986年春の整備開始から約30年間で60種から単一のフィールドとして全国最多と考えられる77種に増加、1年間の確認種数も2004年から2017年まで60種以上を継続しており、今日では常識ともいえる「里山における、人手による多様な生態系維持の正当性」を全国に先駆けて証明できたことは特筆に価するものと自負している。

トンボ類の保護に際し、今日最大の懸案は何といても「子供たちの昆虫離れ・生きもの離れ」と思われる。「あきつ洲」や「勝ち虫」など、ほんの四半世紀前まで日本人の歴史とともにあったトンボであるが、本邦有数のトンボ保護区を擁する当地ですら、最も小動物に関心を持つと考えられている小学3・4年生においても採集経験はおろか、触れない、「顔が怖い」から直視できないという者が少なくない。おそらく、一般的に見れば同年齢の半数近くが昆虫に対し何らかの苦手意識を抱いているようにも思える。本保護区整備開始当初には「トンボ採りの楽しさ」を体験させることが、トンボおよびその生息環境の保全意識を高める一番の手法と考えられた。時に、過剰な採集行為をどのように抑止させるべきかという思案も求められるほどだった。しかし最近の子ども社会において、トンボ採集に射幸心を求める者は皆無といても決して過言ではない。そのため、本保護区に体験学習で訪れる子ども達にトンボの保護を説く第一歩は「暮らしに役立つトンボ」の話だ。大地震後など「飲み水」探しに役立つムカシトンボ、「おいしい米」ができる田んぼで暮らすミヤマアカネ、チョウトンボの逆立ちは「熱中症警報」、温暖化の進行を伝えるベニトンボ、などといった具合。最後に、イヌやネコが飲める水の大半をそのまま飲用できない「ひ弱」な体であるばかりか、生態系のかなり上位に位置する生物しか口にできないグルメな人類は、多くの生物による食物連鎖のお陰で健康的な生活環境と食糧を得ている。優れた殺虫剤ができ、トンボに益虫としての役割が少なくなってきた今日、放っておけば汚濁物質になるかもしれない水中の養分を体一杯に取り込み、羽化によってこれを水の外に運び出すことがヒトにとってトンボ一番の役割ではないか、どこかのアイドルの名言ではないが「嫌いでいいから、いれば役立つ、いないと困るということだけは覚えておいて欲しい」「君たちが大人になった時（つまり約十数年後）、野生生物を守ることで暮らしが成り立つ時代にして欲しい、直接そのような仕事に就かない人も、そのための公的資金投入に反対しない大人になって欲しい」と結んでいる。

1日100種に上る生物種が絶滅しているとの推察もある現在、その保全活動は人類存続も左右する重大事であるにも関わらず、未だ世界中で野生生物の生息環境を犠牲にする経済活動が横行している。当然のことながら、野生生物保全に主眼を据えた活動は当会も含め、経済的弱者であることが少なくない。このような状況下、水環境保全に関わる人々の行動意欲向上、水環境保全への社会的啓発など、日本水大賞が果たす役割は今後ますます重要なものになっていくものと推察され、その継続と一層の発展を願っている。



チョウトンボ♂ & 黄色スイレン池



中村南小学校4年生水辺の楽校  
(生き物探しレベル5)



中村南小学校4年生水辺の楽校  
(飲める水探し)

## 第4回 日本水大賞 (2002年)

### 革新的雨水プロジェクト

雨水利用を進める全国市民の会(当時)

(現在)特定非営利活動法人 雨水市民の会

#### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について

##### 雨水利用で健全な水循環を取り戻すための活動を開始

都市に降る雨は捨てられ、遠くに降るダムに水源を求める、これはおかしいことでは？ という発想から始まった活動である。当会は、雨水を貯めて利用したり地下に浸透させることにより、都市に“ミニダム”を作り、健全な水循環を取り戻すことを目指している。市民レベルで雨水利用を広めるため、全国会議を開催して交流を深めてきた。世界の水問題に貢献するため、バングラデシュのヒ素汚染の地下水に替えて雨水を飲めるように、雨水利用普及の支援を行った。

#### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について

##### 社会的注目はあったものの仕組みづくりは手付かずだった

受賞した2002年当時、雨水利用や雨水浸透に社会的注目はあったものの、仕組みづくりまでは至っていなかった。しかし、洪水防止や水質汚濁防止のための下水道の役割に限界が見えてきた。頻発する集中豪雨による都市型洪水や合流式下水道の越流水による水質汚濁が問題視されてくるようになった。また、阪神・淡路大震災など、自然災害に都市のインフラが大変脆弱であることもわかってきた。このような状況の中、雨の貯留や浸透は、一度期に雨を下水道に流さず、環境にも寄与すること、災害時には雨水タンクは身近な水源となることが、広く認識されるようになってきていた。一方、法整備はまだ伴わず、雨に関わる規制は縦割り行政によるバラバラな対応しかできていないという状況であった。

#### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組みについて

##### 雨に学び雨水を活かす社会を目指して雨に関するイベントを展開する

2002年の受賞後は会の名前を現在のものに変えた。人間を含めた生き物は雨によって生かされていること、私たちの暮らしにも雨が深く関わっていることを改めて思い起こし、雨を大切にして、雨と融和することが必要と考えたからである。しかし、都市は依然として雨を排除する仕組みであり、一般市民も雨は嫌なもの、汚いものという認識がなかなか払拭できていない。当会では、雨水の利活用ばかりでなく雨に学び、感謝し、雨水を活かすことが当たり前になる社会を目指し、市民ならではの活動を展開している。2001年から「すみだ環境ふれあい館」で「雨の環境学習」や「雨の絵本ひろば」の事業を行ってきたが、耐震化の問題から2016年に閉館となった。その後、当会事務局に場所を移して引き続き活動を行っている。さらに、雨水活用の実践を学ぶ「雨水まち歩き」、気軽に楽しく雨を知る「雨タスサロン」や「雨カフェ」、雨が降ると路上に絵が現れる「雨アート」の創作などの活動も行っている。子どもたちを対象に、雨粒となって遊びながら水循環を学べる「雨つぶぐるぐるすごろく」、雨水活用のポスターや自由研究などを募集して行う「雨活アイデアコンテスト」(ライオン株式会社と共催)なども実施している。2015～16年には、会員の協力により雨水タンク水の水質調査を行い、大気汚染物質は問題視する必要がないこと、金属製の屋根材では金属素材が溶出する場合もあることがわかった。

#### ④ 日本水大賞受賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか

##### 「雨水ネットワーク会議」の全国大会、行政では「雨水利用の促進に関する法律」制定

2008年、当会も含め雨水活用に関する団体が中心になり、墨田区で産官学民の交流と情報交換を目的とした「雨水ネットワーク会議」を開催した。その後、福岡、松山、大阪、仙台、福井、愛知、広島でも現地の市民が全国大会を開催している。墨田区での開催開始から10年後にあたる今年は東京で開催した。行政では、2014年に「雨水利用の促進に関する法律」が制定、施行され、国が率先垂範して雨水利用の施設を設置し、市町村の計画のもと雨水利用を促進することが定められた。日本建築学会では、これまで個別の建物を中心に雨水貯留や浸透、利用してきたものを、まち全体で雨をとどめる「蓄雨」という考え方を提示し、2016年に「雨水活用技術規準」を策定した。その具現化のためにNPO法人雨水まちづくりサポートが設立され、雨水活用に関する専門家の育成や雨水活用施設の適切な維持管理のサポートを行っている。当会とも連携して、市民への普及を図る活動を行っている。



すみだ北斎美術館前に雨アートを制作 (2017/11/25)



エコプロダクツ展2017に出展 (2017/12/8)



雨の絵本ひろばで羽子板を工作 (2018/1/13)



雨タスサロンで「雨+膜」の話をする山村寛氏  
(中央大学工学部准教授) (2018/2/21)



雨カフェで「アジアのコーヒーくらべ」のイベントを実施  
(2018/4/28)

## 第5回 日本水大賞 (2003年)

# 稀少淡水魚「ムサシトミヨ」の保護と 生息河川の環境保全活動

熊谷市ムサシトミヨをまもる会

(連携団体 熊谷市立久下小学校エコクラブ)

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について

#### 絶滅に瀕するムサシトミヨの生息環境を守る

川に捨てられたゴミを拾い河川の清掃や、手鎌を使用して草刈するなど水草の整備を行なった。活動を進めるにあたって、環境条件や、水質についてなど、ムサシトミヨの絶滅を抑止するための打開策に対して未知の部分が多く、焦りを感じた。その上、マニアの密漁者が出没したため、密漁パトロールを強化するようになった。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について

#### ムサシトミヨの絶滅の危機に瀕し焦りを感じていた

川に捨てられるゴミや水草の増殖などで河川環境が荒廃しており、ムサシトミヨの生息環境としては問題が多かった。

### ③ 直面した課題と取り組みについて

#### 熊谷だけに生息するムサシトミヨを地元の人々に知ってもらい保護を呼びかける

活動当初、「日本一熱い熊谷にすむ魚」としてPRしたところ、「どんな魚?」「熊谷にほんとうにいるの?」「どんな河川?見たことある?」等々質問攻めにあった。

ムサシトミヨは世界中で熊谷にだけ生息している魚であることから、このことを全面に出して環境保全のための看板を立てた。地元の人々には勿論、他地域の人々にもムサシトミヨの存在を知っていただき保護活動に関心と協力を得るためである。

市内の小中学校と連携して、環境保全とムサシトミヨの増殖活動に取り組んだ。

### ④ 日本水大賞受賞がその後活動にどのような影響を及ぼしたか

#### ムサシトミヨセンターの開設やNHKに取り上げられるなど大きく話題となった

日本水大賞受賞と同時に社会的に大きな責任を感じ、ムサシトミヨの保護と環境保全を推進してきた。受賞後、翌年平成16年熊谷市ムサシトミヨ保護センターが開設された。ムサシトミヨ展示棟も一般公開され、当会の会員が生態の説明や棲息地の案内も行なっている。学習会は、子どもたちを対象に親子で参加するイベントでムサシトミヨの生息地の元荒川の水に親しみ自然に触れるよい機会となっている。こうした体験に即して、川にやさしいアクリルたわしを紹介し、川を汚さないための運動も促進している。

受賞後の動向としてムサシトミヨの生息地区内の熊谷東中学校、佐谷田・久田小学校では校庭にビオトープを造成した。雄・雌20尾を放流しその後生徒・児童たちが水温・清掃等の世話をし一年後の調査では好ましい成果を上げた。

また、平成の名水百選に選定(平成20年)、NHK「ふるさと一番」で絶滅危惧種ムサシトミヨが取り上げら

れ、全国に広くムサシトミヨとその保全活動が紹介された(同21年)、ムサシトミヨの昔を知る「温故知新」開始(同22年)、ムサシトミヨが熊谷市の魚に選定される(同23年)、いい川づくりワークショップ入選、ムサシトミヨをまもる会25周年記念講演会開催、埼玉県・熊谷市より環境賞受賞(同24年)、日本ユネスコ連盟・第5回プロジェクト未来遺産に登録(同25年)するなど、急速に活動の成果を得た。

さらに、当会ではムサシトミヨの水槽での出前教室の出番が毎年増加している。近年は、文教大学(埼玉県越谷市)で毎年イベントに招待され、水槽展示や学習会を開催している。

また、深谷第一高等学校の生徒たちは、大宮国際動物専門学校との先生と学生が協力し、ムサシトミヨの生態をビデオ撮影し全国大会で優秀賞を受賞した。

そのほか地球にやさしいダンロップタイヤ、熊谷南ロータリークラブ等からの熱い支援が寄せられている。

## ⑤ その他自由記述(活動のPR、日本水大賞への意見など)

### 100年未来遺産として次世代につなげたい

### 地域の文化として次世代につなぐ活動を行なう

世界中で熊谷だけに生息するムサシトミヨは、清流と冷水を好むトゲウオ科の淡水魚である絶滅危惧種ⅠA、適温10～18度。棘は7～8本、身を守る時や雄が子育ての巣を守るため外敵の撃墜に使われる。雄が巣をつくり、巣の中へ雌を誘い込んで産卵、孵化、巣立つまで外敵から守る。巣立つと間もなくムサシトミヨは一生を終える。

ムサシトミヨは、シベリア大陸から氷河期に南下して関東地方に定着したと伝えられている。生息地は環境保全転換地区に指定され、流域住民に単独浄化槽から合併浄化槽に転換するための意識啓発を促進し、補助金を受け現在に至る。

水草の整備・植樹はカモが飛来して食害されている。水環境にはムサシトミヨ以外の魚も増殖しているため定期的に駆除している。

水草の整備に際しては開設当初は手鎌を使っていたが現在は草刈機に転換した。

ムサシトミヨを守る会では、1匹たりとも絶命させないために生息環境を守り地域の文化や自然環境とともに100年未来遺産として次世代を担うこどもたちにつなげていきたいと考えている。

\*毎月第1・第3日曜日は、ムサシトミヨの解説と生息地の案内を実施している。



天然記念物・絶滅危惧ⅠA類(CR)環境省レッドリスト  
ムサシトミヨ(トゲウオ科の魚で、体長は3～6センチメートル)



地区内小学校 繁殖調査

## 第8回 日本水大賞 (2006年)

# 農業水路に生きものの賑わいを取り戻す地域づくり

足羽川堰堤土地改良区連合

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容

#### 教育機関、行政、住民とともに農業用水路の生きものの生態調査を行っていた

足羽川地区の農業用水路は、三百数十年の永い歴史を有する管内2,100haの広大な農地を潤す約30kmの水路である。老朽化により全域の水路がコンクリート三面張りに更新されたがそれは「生きもの」について考えずに事業を進めてきた。

子どもの頃を思い出すと小川には魚、貝、水生植物、昆虫が多く生息し、遊び仲間であったのだが、その後は、周辺に何が生息しているのかわからないほど生きものとは絶縁状態となり、関心が薄れてしまったように思う。

そこで、新事業の採択（平成10年度）と同時に足羽川農業用水路の生きものの生態、何処にどのような生きものがあるのか、当連合が主体となって、小、中、高校、地域住民、行政、各団体に協力を求め、調査を開始した。ワークショップを重ね、水を利用したビオトープづくり、水路の改良、植栽等生きものが賑わう地域づくりへの活動を行い、住みたくなる農村の魅力向上を目標に掲げて活動してきた。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況

#### 開始から10年を経て活動が根付いたのを期にビオトープづくりを開始した

小動物の棲みかとして「ビオトープ」づくりの協力要請をしたところある小学校で説明のとき「ビオトープって何のことですか?」と地域住民はビオトープについての知識はなかった。その後、ドイツ、スイスの事例、生きものの生態などについて学び意見交換を繰り返し、「生きものと共生する農村社会をつくろう」との呼びかけをしながらハード面、ソフト面の両面からの取り組みを開始した。子供たちには「土や水、生きものにふれあい、やすらぎとゆとりの時間をつくりましょう」「水は食料の生産、生活用水、防火用水、環境、生態系の保存など多面的な機能を有しています。水は限りある資源です。みんなで水を大切にしましょう」と説明会で繰り返し、本題に入っていた。当時は、市街地、集落を流れる水路には、当然のように家庭の雑物や雑廃水、雑草等が投棄されており、用水路はあたかもゴミ捨て場のような感覚で捉えられていたのではなかったのかと思われる。その結果、当然「足羽の清流」にはほど遠く、とても生きものが棲めるという状態ではなかった（昔の田植えは大半が湿田だったため、小魚が手で跳ね、蛙が鳴き、蝶が舞い周辺はのどかな農村特有の風情があったのだが）。施設計画のワークショップでは、足羽川地区の絶滅危惧種の把握、在来の生きものの生態、水路の形態、水温、流速、水質等専門家の指導も受け、土水路時代の生きものについては、経験者（高齢者）からかつての様子を聞き取りするなど実態を把握することに努めた。そして水路に生きものをどのようにしたら呼び戻すことができるのかということは何度も話し合っただけでなく、生きものと共生する農村社会の再現を目指す環境活動に邁進した。

### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決のに向けた取り組み

#### 管内の人々の理解と協力が得やすくなり活動が活発化した

受賞を期に、管内の地域住民、小学校、NPO、関係団体等の理解・協力が得られ活動が活発になった。管内に環境施設（ビオトープ）の設置。面タイプ6施設、水路タイプ10施設を造成した。水路には産卵場、隠れ場、越冬場、落差工には魚道を設けた。結果これらが生きものの棲みかとなり、同時に地域の憩いの場となっていった。生きものと共生する農村社会が実現したことにより、地域住民の生きものに対する考え方が大きく変わった。

地域ぐるみの活動が評価され、関係機関、団体、行政機関から表彰受賞の栄に恵まれ、環境、生態系保全活動が更に飛躍した。「足羽の清流」をキーワードにして展開した環境活動の成果は、○平成15年 21世紀土地改良創造運動大賞 受賞 ○平成17年 疏水百選 認定 ○平成18年 日本水大賞 受賞 ○平成23年 21世紀土地改良区創造運動大賞 受賞 ○平成23年 21世紀土地改良区創造運動北陸地方大賞 受賞 ○平成24年 農林水産大臣賞 受賞 ○平成28年 足羽川用水 世界かんがい施設遺産に登録 等である。

また、施設の管理が将来の問題となるため、完成した施設の維持管理は事前に地域ぐるみで行なうことの約束を取り交わしてから計画に入った。計画には地域住民も参加し地元地域の特性を計画に入れることにした。施設の土地については地権者の協力を得ることができた。施設の維持・補修費については、多面的機能事業で対応する。連合が支援する。但し日常の管理については、自治会もしくは青年会、老人会、婦人会、子ども会等の関係団体が行っている。このほか、その後、環境施設の保全・維持、「足羽の清流を守る団体」が新たに加わり活動している。(楨山地区水環境整備事業保全委員会、上東郷地区生態系保全委員会、半田地区環境保全委員会、小学校 他10団体)

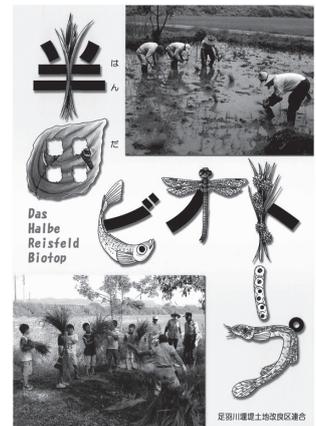
#### ④ 日本水大賞の受賞がその後の活動にどのような影響をおよぼしたか

##### ビオトープにホタルが飛び交い水路に清流が戻り祭りが復活し、海外からの見学者も増えた

小学校の授業ではビオトープを使った環境学習を取り入れている。ビオトープは生きものにふれあう実践活動の場となっている。また環境学習の出前事業も行なっている。例年6月はビオトープにホタルが飛び交うため、家族が連れ立ってホタル観賞に訪れることができる地域の名所となった。環境水路では昆虫採取、魚とりが出来るようになり、家族で遊び生きものと共生して暮らしていた昔の農村風景がよみがえった。水路内のゴミが極端に減少し、足羽の清流が戻ってきた。地域間の連携、人と人のつながり、さらに三世代間の話題が多くなった。足羽川用水が平成28年11月「世界かんがい施設遺産」に登録され「足羽の清流」は地域の宝となった。

足羽に清流が戻り、清流の復活は地域で新たなイベント（おつくね祭り、せせらぎコンサート、花植えや植栽活動、清掃活動など）を生む機会となった。久しく絶えていた「かわうそ祭り」が新たに再開し、地域に元気が出てきた。県内外から足羽川用水の見学者が多くなり対応に追われている。海外からは、西アフリカ、台湾、韓国、カナダからの見学者が訪れ、その度に必ず「日本水大賞」の話をしている。用水沿いに遊歩道を整備したことで「水」を眺めて歩く地域住民が増えた。また、県内外の団体がウォーキング大会を実施するなど地域の賑わいが一段と高まった。水路には、鯉、鮒など多種の川魚が泳ぎ、水中プランターの設置や河畔には四季の花が咲き環境水路のイメージアップが図られた。

日本水大賞受賞により、広報活動（パンフレット、冊子、新聞、テレビ、ホームページ）が盛んになり、地域住民と管内の関係団体に大きな刺激を与えたと思う。



#### ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など）

##### 地域の人々に水に対する意識へとつながり、清流を次世代につなごうという気運が高まってきた

足羽の清流は先人の知恵、技術力、農業者の努力によって、農業の安定した「むら」が生まれ、今日の地域振興の礎となってきた。活動の成果とその評価となった日本水大賞を得て、受賞後は、これら地域の宝を再認識し、次世代に託していこうという地域の気運が高まってきたのではないと思われる。イベントを実施する団体は、水を有効活用して、地域の健康づくりや人づくりに大きな役割を果たしている。

日本水大賞が、福井県内の環境活動に大きく刺激を与えたことは周知のとおりであるが、足羽管内の水路の形態（開水路）が生きものの生息に恵まれていたせいかもしれない。このように多くの協力で平成18年に掲げた目標「農業水路に生きものの賑わいを取り戻す地域づくり」が着実に進展している。

## 第10回 日本水大賞(2008年)

### ふるさとの水循環系と水文化の一体的な保全活動

熊本市

#### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について

##### 地下水を共有する近隣市町村と効果的な水質保全対策に取り組む

熊本市は、水道水源のすべてを良質な地下水で賄う「日本一の地下水都市」である。

市民の宝ともいえる地下水を後世に守り伝えて行くことを目的に、県市共同で実施した地下水調査（S48～49年）の結果に基づき、効果的な水量保全対策として地下水を共有する近隣市町村と協定を結び、転作田を活用した湛水事業や水源かん養林整備事業の推進を展開し、市民総参加による節水市民運動に取り組んでいた。

水質保全対策については、地下水質の常時監視や汚染が判明した地区の地下水浄化対策、硝酸性窒素削減対策にも取り組んでいた。

更に、熊本水遺産登録制度など、水が織り成す歴史や文化の保存・継承にも取り組んでおり、総合的な地下水保全事業を展開していた。

#### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について

##### 「熊本市地下水保全条例」の改正と「熊本市地下水保全プラン」

##### 「熊本地域地下水総合保全管理計画」を策定、地下水保全の連携強化を図る

本市は、古来より地下水の恩恵を受け、水環境に恵まれた都市である。しかし、生活水準の向上や産業経済の発展に伴う大気汚染や排出される汚水など水環境に及ぼす影響が顕在化していた。このような状況から、本市では市民・事業者等と連携して推進していくため、平成19年に地下水を水質・水量の両面から総合的に保全する条例として「熊本市地下水保全条例」を改正した。更に、平成21年3月には具体的な数値目標を設定した「熊本市地下水保全プラン」を策定し、これまでの取り組みの定着・強化を図った。

また、市域を越えた広域的な取組みについても、地下水を共有する近隣市町村と共同で、平成20年に「熊本地域地下水総合保全管理計画」を策定し、地下水保全の連携強化を図った。

#### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組み

##### 「熊本市硝酸性窒素削減計画」に基づき農政部局と連携し水質の維持管理に努め、水源をかん養し、地下水が育む総合的な熊本ブランドの発信に努める

受賞以前から取り組んでいる水源かん養林による地下水かん養量を定量的に検証することが難しいという課題がある。これについては現在、九州大学等と連携してより定量的な方法を検討している。

白川中流域における転作田を活用した湛水事業については、稲作の生産調整や熊本地震（平成28年）の影響等もあり、ここ数年は地下水かん養量は減少している状況である。熊本地震による水路等の被災箇所は概ね復旧してきているが、稲作を取り巻く環境は依然として厳しく、湛水事業の対象区域の拡大や対象期間の柔軟な運用等の対応が必要とされている。

水質面では、概ね良好な水質レベルを維持しているが、地域によっては硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素の濃度が環境基準値を超過、又は超過しないまでも上昇傾向を示している区域がある。この課題に対して市は「熊本市硝酸性窒素削減計画」に基づき、農政部局と連携して果樹作物への施肥対策等を行っている。その結

果、一部の井戸では濃度の低下傾向が見られるようになってきた。しかし、本市の重要な地下水かん養域である東部区域は、畜産業が盛んな地域である。家畜の排せつ物に由来する窒素負荷量を削減するため、平成31年4月に堆肥化施設を稼動する予定である。

また、本市における地下水の魅力を広く理解してもらうことは、人々の地下水保全に対する意識の向上に繋がっていくとともに、来訪者の増加、移住者の増加を期待できるものと思われる。今後も、水にまつわる歴史や文化を保存・継承し、地下水という恵まれた水資源を有効資源と位置づけて活用し、良質な地下水により育まれる農産物や食文化、観光資源、更には「蛇口をひねればミネラルウォーター」が使える上質な生活など、水を生かした総合的な熊本ブランドの発信にも努めている。

平成24年には、広域的な地下水保全を図るため、公益財団法人くまもと地下水財団を設立した。

更に、調査・研究の分野においては、国や関係機関と連携協力し、地下水流線図の作成など「地下水の見える化」に取り組み、水質・水量保全の効率、効果的な対策に活用している。

#### ④ 日本水大賞受賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか

#### 水大賞受賞後、シンポジウム開催や多数の水ブランド事業が具現化し、熊本市の水に関する活動は広く内外から注目されるようになった

日本水大賞受賞については、翌年にシンポジウムを開催し、市民・事業者とその喜びを分かち合おうとともに、数々の水ブランド事業が具体化に繋がっており、その後の活動の励みとすることができた。

更に、本市の持続可能な地下水保全の取り組みは、この受賞を契機に「2013“国連生命の水”」最優秀賞を受賞するなど国際的にも注目されてきている。これらの取り組みは、国際会議の場でも先進的な活動として紹介されている。

今後も、持続可能な地下水保全の取組みをさらに推進していきたい。わたくしたちの活動が水環境に苦しむ多くの国々に希望を与え、水に関する課題解決の一助となるよう積極的な情報発信を行うなど、国連SDGsの地域貢献として国内に留まらず国際的な協力も図っていきたい。



近隣市町村との地下水保全協定締結



市民協働による節水市民運動



水源の森づくりボランティア活動



ガイドブックほか啓発パンフレット・小学生向け副読本

# 第11回 日本水大賞 (2009年)

## メダカの生態学的研究と啓発活動の継続

～環境問題の今日的課題へのアプローチ～

山口県立厚狭高等学校 生物部

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容

#### メダカとカダヤシの種間関係と水環境を調べる

山口県立厚狭高等学校の近くには、豊かな水を湛える厚狭川が流れ、恵まれた自然環境が残っている。生物部の生徒たちと学校周辺の野外調査をしていて、メダカが生息する場所が少ないことに気付き、メダカの生息状況に関する詳しい調査を開始した。以来、休日には生徒たちと川や水田地帯の水路に出かけて分布調査をし、平日は校内で実験に取り組む。活動の成果をまとめて発表することで、専門家の先生方から助言をいただき、それが次の活動への課題の発見やヒントとなっていた。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況

#### 外来生物による生態系への影響や放流された固体による遺伝子汚染が懸念された

山口県全域に及ぶメダカの分布調査（1999年、2000年、2006年、2007年）の結果、メダカ（*Oryzias latipes*）と外来種であるカダヤシ（*Gambusia affinis*）が共存している生息地点や、メダカとヒメダカと一緒に泳いでいる生息地点があった。このような状況の中で、生徒たちは、外来生物による生態系への影響や、放流された個体による遺伝子汚染を懸念した。その後、環境に関するイベント等で、調査・研究で得られたデータを用いて発表をしたところ、「カダヤシはメダカと見分けがつかないような小さな魚だから、環境に対してのさしたる影響はないのでは?」、また「遺伝子汚染という言葉を初めて聞いた」等々の意見があったため、啓発活動を早急に展開する必要性を感じるという状況であった。

### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組み

#### 担当教員の転出と活動テーマの継続における問題点

水大賞はとても大きな賞なので、「メダカの研究」で当校が受賞し広く報じられたことで、生物部の活動内容を多くの方に知っていただき、大変ありがたく感じた。受賞を機に、この活動をさらに発展しながら継続することに期待が寄せられていた。

しかし、学校の部活動で取り組む研究は、担当する教員と部員である生徒との話し合いにより活動内容を決定していくという方針であるため、その後も継続して研究テーマを追って活動できなくなることもあり、このことが課題となっていると感じている。厚狭高校においても、新たな担当教員と入部した生徒との話し合いで「メダカとカダヤシ」の研究は打ち切りとなった。その後、先輩達の残した論文に触発され、個別に「厚狭川の魚類の生息調査」を行った生徒もいた。

現在は「ウミホタルに関する研究活動」に取り組むこととなり、近隣の海辺に出かけ、ウミホタルの生息状況調査等を行っている。水環境の研究は、人間社会の営みと環境の保全に果たす水の機能を考えるうえで大切なテーマであると痛感している。状況に応じてテーマを柔軟に変更しながらも、水に関する活動を継続することが大切だと思う。

#### ④ 日本水大賞受賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか。

##### 受賞したことで全国の活動状況や水に関する広範囲な社会の事柄を意識する

当時テーマとしていた「メダカとカダヤシの種間関係」や「放流されたヒメダカによる野生メダカの遺伝子汚染」は、今日的な環境問題を象徴する重要な課題だと考え、生徒も教員も夢中になって活動に取り組んでいた。受賞するまでは自分たちの活動に関連した分野に対してのみ注目していたが、受賞を機に、全国各地で実に多くの団体が水に関する活動を精力的に展開していることを知り、水に関連した幅広い事柄について意識するようになった。全国の各団体の皆様と水への想いを共有したことが、その後の活動を継続する大きな活力となっている。

卒業生は、学校から離れても、それぞれの生活の中で水に対する意識は高いようである。担当していた当時の教員は、転出先の高校で、生徒と一緒に新たに水質検査に関する研究を展開し、継続的に水に関する活動をしている。学校での活動を評価してくださる日本水大賞での表彰は、水に関する課題を解決していくという人材が社会に広がっていくという点で、大きな波及効果があると感じている。

#### ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など）

##### 「さんフェアやまぐち2018」でブースを展開し地域と触れ合う

現在、県立厚狭高校全日制は、1学年普通科3クラス、総合家庭科1クラスの学校である。昨年からウミホタルの研究に加え、「タデアイの染料づくり」の研究を本格的に始めた。タデアイの栽培を行い、泥藍づくりに取り組み、総合家庭科と協同して「藍染め」にも挑戦している。2018年秋、山口県で開催される「さんフェアやまぐち2018」\*で行われた総合家庭科ファッションショーで、この染料で「藍染め」した生地で作られた作品を発表した。また、毎年地元で開催される「山陽小野田かがく博覧会」では、「葉脈標本しおり」作製と、身近な生物を紹介するブースを出展している。このイベントは地域の方と、直接触れ合う貴重な場で、特に子どもたちに喜ばれる人気のブースになっている。現在でも、生物部の生徒たちが活気に満ちた活動を展開している。

日本水大賞及び日本ストックホルム青少年水大賞は、高校生たちが水に関する課題に注目し、活動する上での大きな目標となっている。特に、SJWPでは、世界の国々が直面している切実な課題に対して使命感をもって取り組んでいる各国の高校生と交流し、世界へ目を向ける良い機会となっている。

\*第28回全国産業教育フェア山口大会（主催：第28回全国産業教育フェア山口大会実行委員会、文部科学省、山口県、山口県教育委員会、山口市、周南市、山口市教育委員会、周南市教育委員会、公益財団法人産業教育振興中央会、全国産業教育振興会連絡協議会、山口県産業教育振興会）



分布調査の様子



「山陽小野田かがく博覧会」(2017年) ブースにて

# 第13回 日本水大賞 (2011年)

## 水辺に人が集まるまちづくり

～吉野川をはさんだ水際交流拡大プロジェクト～

特定非営利活動法人 新町川を守る会

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について

#### 活動開始から20年、清掃のみならず集客を目指す河川での交流活動を開始した

受賞時の平成23年は、当会が平成2年に発足してから20年が経ち、川の清掃や川を活かしたまちづくり事業が地についてきたことから、新しい事業に取り掛かった時期でもあった。

遊覧船事業においてはひょうたん島遊覧船の運航に加えて撫養航路の運航を始めたり、また河川交流においては吉野川上下流の交流に加えて日本三大暴れ川の交流を始めたり、さらには川を活かしたまちづくりにおいては寒中水泳大会等に加えて水際コンサートや阿波踊り水上ステージを始めた時期でもあった。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について

#### 新町川から吉野川へそして水源地域の植樹へと活動範囲を広げ流域の交流と活性化を目指す

当会は平成2年に新町川の清掃からスタートし、吉野川河川敷の清掃へと活動の輪を広げてきたが、平成14年に吉野川の水源地域にあたる早明浦ダム周辺の森がどうなっているのかを確かめたくなり、早明浦ダム上流に位置する高知県大川村の村有林を借りて植樹を始めた。その後、間伐遅れによる森の荒廃が心配になり、吉野川下流域で水の恵みを受けている徳島県と香川県のNPOが連携し早明浦ダム周辺の森で「森の健康診断」を実施することになった。

また、当会は人口約400人の大川村を元気づけるため、平成25年に徳島市で「がんばれ、大川村」を開催したり、平成29年から新町川遊覧船発着場において大川村の特産品である土佐はちきん地鶏を販売するなど大川村と相互交流を続けている。

### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組みについて

#### 遊覧船乗り場浮棧橋建設や徳島中心市街地の花植え、藍染のPR活動等を展開し賛同を得る

受賞後においても川の清掃等河川環境の向上並びに川を活かしたまちづくりに継続して努めてきたが、これら継続事業以外の新しい事業として、平成24年に遊覧船乗り場浮棧橋の建設、平成26年に徳島市中心市街地国道の花植えをするため「とくしままちなか花ロードproject」の立ち上げ、平成28年に藍染めをPRするため「藍LOVE新町川」の立ち上げ等を行った。

遊覧船乗り場浮棧橋の建設にあたっては金融機関から1,000万円超の借入をして7年にわたって返済をしているが、遊覧船事業が市民を始め県外客や外国人に受け入れられ、浮棧橋建設後の遊覧船乗客数の増加もあってこれまでどうにか滞ることなく返済できている。

国道の花植えについては、平成26年スタート時から毎年会員や国道周辺の企業に寄付金を募っているが、毎日の国道での水やりや草抜き、ゴミ拾いなどの花植え活動が認められて、毎年100万円超の寄付金が集まっている。

このように受賞後はこれまでの継続事業はもちろんのこと、新規事業も順調に推移しているが、これらは受賞による社会的信用の増大が大きかったのではないかと思っている。

#### ④ 日本水大賞受賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか

##### 社会的信用へとつながり、自発的参加者が増加、活動への市民の理解が得やすくなった

当会は平成23年に日本水大賞を受賞しましたが、そのことにより社会的信用がつき、われわれ会員にとっては自信につながるとともに、ボランティア活動をするうえで大いに励みになりました。

また、当会が全国的に認められた結果、有形無形にプラス効果が表れました。当会の会員が増えたり、NPO活動に自発的に参加してくる者が現れたり、イベント活動に多くの人が集まるようになりました。また、当会のイメージがアップし、寄付金についても市民の理解が得やすくなり、集めやすくなりました。また、受賞後は理事長には各県から講演依頼が相次ぎ、当会のPRになったものと考えております。

#### ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など）

##### 副賞は有効に使い活動の継続につなげた

平成23年当時は、当会にとって新しい事業に着手して資金的に苦勞していた時であった。そのため、受賞による副賞は大いに助かり、有効に使わせていただいた。



新町川の清掃



遊覧船の運航



吉野川上下流の交流



阿波踊り水上ステージ



寒中水泳大会



森の健康診断

# 第14回 日本水大賞 (2012年)

## 東日本大震災への緊急対応

～良好な水環境と災害に強い柔軟な簡易トイレシステムの構築のために～

トイレの未来を考える会

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容

#### 大便と尿を分離する簡便な組立式ユニットトイレの開発

2011年3月11日に発生した東日本大震災の直後には、ライフラインが機能しない状況であった。衛生的で快適なトイレ環境を整備・維持することを目的に、ポータブル型の無水し尿分離型トイレユニットを設計・開発し、東北各地に緊急導入した。このトイレユニットは、運搬・備蓄が容易で軽量な組立式であり、大便と尿を簡易に分離できる形状とした。分離した大便は、消石灰と粉殻炭を添加することで無臭化、衛生化を実現した。また、病原菌をほぼ含まない尿は、消石灰添加によりリンと窒素を沈殿除去して処理することが可能であった。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況

#### 被災地のトイレについて即時対応を考える

東日本大震災は、東北地方・関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。家屋被害は、全壊・半壊を合わせて100万戸を超え、停電世帯は800万戸、断水世帯は180万戸に上った。ピーク時の避難者数は45万人を超え、2,000箇所以上の避難所が開設された。全国から緊急支援物資が全国から届けられたが、トイレについては、十分な備えがなく、従来の水洗トイレが使用できなくなったことで、多くの人々が劣悪で非衛生的な排泄を余儀なくされ、被災者にとって大きな問題であった。

### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組み

#### 尿と大便の性質を利用し衛生処理を実現した

本活動では、プラスチック段ボール製で、軽量の運搬・備蓄が容易な組み立て式の数種類のポータブル型無水し尿分離トイレユニットを独自に設計・開発した。これらのトイレユニットは床上にそのまま設置して利用できるばかりではなく、避難所や仮設住宅等を含めた既設の洋式・和式トイレ便座の上に容易に設置できるもので、周辺環境への影響を軽減できるようにし尿分離機能を有するトイレユニットとした。

開発に際して、市販の簡易トイレの状況を調査した結果、いずれも排泄されたし尿を凝固剤等で固めて処分するもので、これでは日々蓄積する廃棄物の処理が必要となり、被災地に更なる負担をかけてしまうことが懸念された。し尿を簡易に分離し、病原菌をほぼ含まない尿は汚染物質（窒素・リン）を沈殿除去後に放流・土壌浸透し、大便には消石灰と粉殻炭の混合物を添加しアルカリ化・乾燥化によって衛生処理を実現することが可能なものとした。

無水ポータブル型し尿分離トイレユニットを複数回にわたり被災地に持ち込み、その組立・設置・使用方法と分離した大便と尿の衛生的な処理方法を説明し、下水処理システムが復旧するまでの間、被災者に利用してもらおうと共に、アンケート調査に基づき、改良を加えていった。

本活動により、東日本大災害被災地のごく一部ではあるが、水系伝染病等の感染症発生を抑制し、下水道システムの復旧までの数年間の衛生的なし尿処理システムを供給することができたと考える。

#### ④ 日本水大賞がその後の活動に及ぼした影響

##### 無水処理システムを開発し災害に備える

日本水大賞の受賞により、東北地方の市町村や、被災地以外の日本各地の市町村等から災害備蓄用として問い合わせが寄せられた。

また、その後の活動により、災害に強い新しい町づくりの一貫として、災害の際に避難所となる公共施設だけでなく、各家庭でも常時設置可能なし尿分離トイレユニットと、分離したし尿の無水処理システムを設計・開発するに至った。このトイレユニットとシステムは、通常時には大便を下水道に直接放流し、尿はリンを有価資源として回収してからその上澄みのみを下水道に放流するシステムとした。災害発生時には、下水道には放流せず、大便を回収し衛生化することにより、自立分散型の無水し尿分離トイレとして機能するものとした。こうした常設型のシステムを公共施設に設置することで、地域住民が平時からこのし尿分離システムに慣れ、災害時にもスムーズに無水処理が実現できることになる。さらに、ポータブル型し尿分離トイレユニットを組み合わせることで、より広い範囲で対応可能な自立分散型の新しいし尿処理・下水道システムを創造することができるものと考えている。

#### ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など）

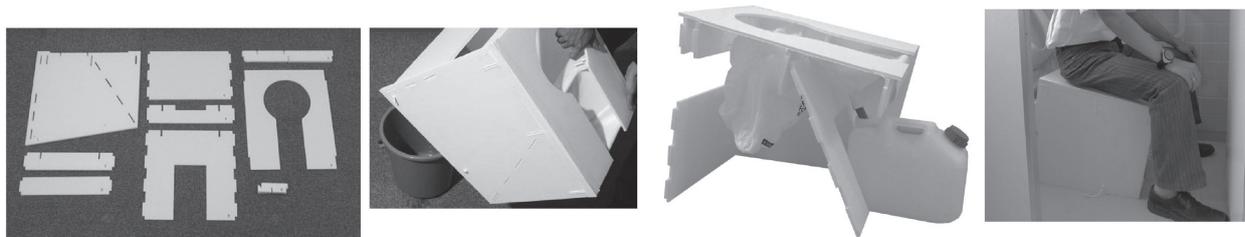
##### 企業の協力を得て製品化に至る

本活動で開発したプラスチック段ボール製の無水ポータブル型し尿分離トイレユニットは、その後改良を重ね、民間企業の協力を得て、現在では製品化されている。平成30年6月に内閣官房より発行されて「国土強靱化民間の取組事例集」に災害時のトイレで課題とされる“ごみ問題”や“衛生環境問題”を解決する画期的な商品として掲載されている。

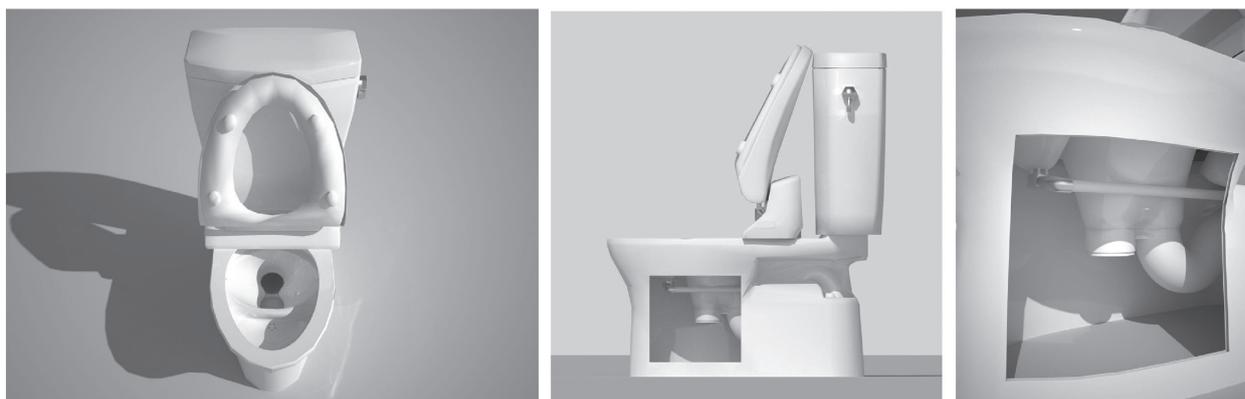
※詳細は、内閣官房ホームページ

[https://www.cas.go.jp/seisaku/kokudo\\_kyoudjinka/h30\\_minkan/index.html](https://www.cas.go.jp/seisaku/kokudo_kyoudjinka/h30_minkan/index.html)

「活動集一括」をクリックして事例番号465(p272)をご覧ください。



プラスチック段ボール製の無水ポータブル型し尿分離トイレユニットの構造と分離回収の仕組み



平常時にも災害時にも対応可能でし尿分離型トイレユニットの構造

## 第15回 日本水大賞 (2013年)

### 津波により水利が崩壊している地域での農作物栽培

マイファーム亘理協同組合

#### ① 地這えトマトを作付け日本水大賞受賞当時の活動内容について 東日本大震災で被災した農地を再生し地這えトマトを作付した

宮城県亘理郡亘理町において東日本大震災で津波被害を受けた農地を再生し、加工用のトマト栽培を行っている。塩害の被害が起きている場所では微生物資材を投入して塩害を取り除き、水路が破損している場所では栽培方法と作物を工夫し加工用の地這えトマトを作付けし、現在では年間で200トンを超す生産を行っている。

#### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について 壊滅的な農地の被害を受けて、政府、自治体、農業者も四苦八苦であった

震災直後、現地の農業はほぼ壊滅的な被害をうけ、農業者は他産業への業種転換を図らざるを得ない状況であった。農地はがれきが積みあがり、がれきでつまった水路を復旧するには相当な費用がかかるため絶望感が漂っていた。それまでの現地の特産物は土で栽培するイチゴだった。しかし、復興計画では水をつかった水耕栽培イチゴが提案され、それには大きな投資が必要となり、政府、自治体、農協、農業者ともに四苦八苦をしている現状であった。

この状況が京都の農業ベンチャー企業 株式会社マイファーム 代表者の西辻一真氏が来たことによって解決できるのではないかという希望を見つけることができた。彼は震災直後から被災地に入り同様の状況の場所でも作物栽培ができるよう、農家を指導したり、特殊な塩害土壌改良材を開発して震災後 数ヶ月以内にかれきのど真ん中でも作物が作れるという実績を持っていた。私たちの亘理町の北に位置する岩沼市では「復興トマト」という名のブランドを立ち上げて既に農家が生産を始めているという話を聞いていた。私たちは2012年3月末日に協同組合を設立し、組合員20名のもっていた農地を纏めて共同で管理し効率的に再生をさせていくという方式で、農地の集約を行った。その際に上層のがれきを取り除き、コンクリートで固めない程度に水路を掘り、塩水を貯める場所を設けて、塩水を貯め地下水をくみ上げて地下水をできるだけトマト苗に浸透させないよう水抜きをし農場としての形を整え、マイファーム社が開発をした塩害改良剤を撒いた。その結果、数ヶ月後には劇的に塩分濃度が下がっており、元々塩に強いトマトであれば栽培可能だという見地を得た。

#### ③ 受賞後の活動について 水利が崩壊している地域での農作物栽培を広げたい

これから私たちは水利が引けないような農地でも作物栽培ができないかを研究してこの農地でトマト以外の品種などにも取り組んでその知見を世界中の農地で水利がひけなくて困っている地域に提供をして世界の食糧問題にも一筋の光を射せるような存在になっていきたいと考えている。本活動を見たトルコや中国、ツバルなど世界中の地域から同様の問題が発生していて手伝ってほしいと依頼も頂いており、活動の輪を広げて世界中の絆を繋げていきたいと思っている。

#### ④ 日本水大賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか？ 働くメンバーの目が輝くとともに共感してくれるひとの輪が広がった

本賞を受賞後はまず働くメンバーの気持ちに変化があった。それまでは暗中模索の中で日々を乗り切るために栽培をしていたのだがそれ以降は「私たちは大切なことをしている」という自負が生まれ、目の輝きが変わった。周囲の反応も変わり、商品提案をする際も本賞の説明をしたときに共感をしてくれ受注できることも多くあり、そのつながりから過去の受賞者との縁につながり、心づよい言葉をいただいたことも多々あった。

# 第16回 日本水大賞 (2014年)

## 水と闘い半世紀 新たな時代の水防団

～次世代を担う若年層へ水防の継承～

岐阜市水防協会

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について

#### 岐阜市内の小中学生に過去の被害を伝え、土のう積みなどを通じて水防の意識向上を図る

岐阜市立三輪中学校や長良小学校など、次世代を担う地域の小中学生に対して、過去の被害を語り継ぐ講義を実施したり、土のう拵えや積み土のう工の実演・体験を実施するなど、水防に関する啓発活動を通じて、子供から家庭へ、家庭から地域住民へ、被害に対する意識向上を促した。各地域（自治会連合会）が実施する地域防災訓練においても、上記と同様の活動を行い、水防に対する理解の裾野を広げ「自助」「共助」が活かされる土壌づくりを推進した。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について

#### 水害の記憶が風化していくような状況のなかで水防団員の確保が問題になっていた

当時の水害は「全国的に過去に経験がない」という表現が多用されるほど、時と場所を選ばず発生しており、各地で未曾有の水害が発生していた。一方で、岐阜市内では、大きな被害を伴う水害が発生していなかったことから、水害の記憶が風化し、水害（水防）に無関心な住民が増加していた。また、社会経済の進展に伴い、産業構造や就業構造が大きく変化し、所属水防団の大半が被雇用者となっていた。このことから、団員確保が困難となり、有事の際に水防活動を行える団員が不在であるという問題が発生していた。

### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組みについて

#### 水害の記憶が風化している今、水防への意識を換気し防災教育に取り組む

○課題：①岐阜市水防団は、現在も高い充足率（約98%）を維持しつつも、年々団員数が減少している。②近年、岐阜市内で、大きな水害が発生していないことから、水害の記憶が風化し、水害（水防）に対する意識・経験が希薄である。

○取組：①啓発活動の内容について、積み土のう工などの水防工法体験のほか、水防倉庫や樋門・陸閘等の見学会も実施している。②一部の水防団において、国土交通省中部地方整備局木曾川上流河川事務所が推進している防災・河川環境教育に協力し、地元小中学校の教師と共に授業の一環としての防災教育に取り組んでいる。

### ④ 日本水大賞受賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか

#### 水防への啓蒙活動は現在も継続し、活動回数、参加生徒数も大幅に増加

小中学生及び、地域住民に対する水防に関する啓発活動は、現在も継続しており、活動回数及び参加生徒数が大幅に増加した。

年度	活動回数	延べ参加生徒数
H27	33回	2,960人
H28	38回	3,848人
H29	34回	4,328人

岐阜市立三輪中学校の取り組み（水防団活動）が評価され、平成28年度に国土交通大臣表彰（水防功労）を受賞した



壊れた堤防を守る水防団員ら（岐阜市尻毛）  
昭和51年9月



三輪中学校 木曾三川  
連合水防演習に参加

# 第18回 日本水大賞 (2016年)

## 恵みに感謝し緩やかな連携で豊かな流域を 筑後川流域連携推進事業

特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容

#### 筑後川流域を一体的に捉えて多彩なイベントや新聞の発行を行なっている

筑後川流域を一体的にとらえて、流域連携によって、持続可能で質の高い生活を実現することを目指す。そのための活動として、筑後川フェスティバルの開催、筑後川新聞の発行、筑後川流域をよく知るための筑後川まるごと博物館、筑後川流域を一体化した広域観光としての筑後川まるごとリバーパークと川の駅、筑後川流域の物産を掘り起こし、地域経済活性化を目指す「筑後川ブランド」形成に取り組んでいる。また、利根川、吉野川との三河川交流を行っている。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況

#### 流域全体が一体化し産官学民が連携して質の高い生活を実現を目指しつつも、まだ初期段階である

平成24年の北部九州豪雨では、筑後川、矢部川流域が甚大な被害を受けた。また少子高齢化と過疎化は地域経済や社会を衰退に向かわせる要因としてひしひしと迫ってきている。これらに対処することを目指した地域創成への期待がよせられているが、決定的な手は打たれていないし、見つかっていないようである。質の高い生活を実現するという目的に向かって、流域全体が一体化して、産官学民が連携して取り組まなければならないところである。平成の大合併が一段落ついて新たな局面の模索が始まり、「水循環基本法」の施行と相まってその機運は高まっているが、具体的活動はまだ初期的段階にある。

### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決のに向けた取り組み

#### 九州北部豪雨 (2017) の甚大な被害を受けて防災と山林の整備が最大の課題

受賞後、第30回～32回と3回の筑後川フェスティバルが開催された。その中で、筑後川流域の産官学民が参加して、流域の課題とその解決に向けての取り組みについて話し合う『筑後川流域コンセンサス会議』が開催された。平成29年7月の九州北部豪雨で、朝倉市、東峰村、日田市が甚大な被害を受けたこともあって、防災のことが中心的な話題になった。衆知のように、豪雨によって、土砂とともに大量のスギ・ヒノキの流木が発生したことが、被害を大きくした。戦後の拡大造林政策による過大な植林と、その後の国産材価格の低下に伴う間伐などの整備不十分が原因であることは衆目の一致するところである。山林の崩壊を防ぐためにも、川に豊かな清流を取り戻すためにも、どのようにして荒廃した山林を整備し、災害に強い山・森づくりを行うかが最大の課題である。

筑後川流域も少子高齢化と若者の大都会への流出という過疎化にみまわれて、先行きの見通しは楽観できるものではない。このような状況の下では、前述したように、質の高い生活を実現するという目的に向かって、流域全体が一体化して、産官学民が連携して取り組まなければならない。例えば、観光振興は地域にとって経済・文化・環境の3面から望ましい結果をもたらす。地域創成の重要な手段の一つである。当法人筑後川流域連携倶楽部が中心になってかねてから実施してきた広域観光「筑後川まるごとリバーパーク」と川での体験活動の基地となる「川の駅」の推進に取り組む。近年は外国からの観光客も多く訪れているので、そのことも視野に入れる。

#### ④ 日本水大賞の受賞がその後の活動にどのような影響をおよぼしたか

大賞受賞が新聞報道され、筑後川流域連携倶楽部の活動が広く知られるようになり、公的機関との協力依頼がしやすくなった

日本水大賞の受賞が、新聞などに掲載されたこと、久留米市長と福岡県知事を表敬訪問したことなどにより、筑後川流域連携倶楽部の活動が広く一般に知られるようになった。自治体等の行政機関や企業などの民間機関に当法人の活動への協力を依頼した場合にも、以前よりもよい反応が得られるようになったと思える。

しかし、一般には、日本水大賞の認知度はあまり高くなく、こちらから説明して初めて知ってもらったことも少なかった。

#### ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など）

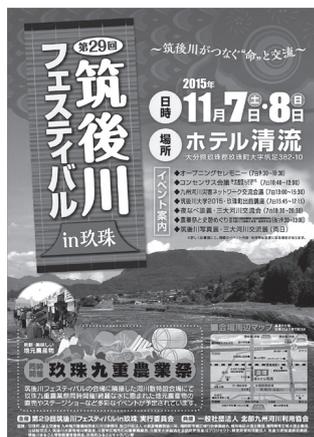
筑後川流域を一体的にとらえ、持続可能で質の高い生活の実現を目指し活動してしてきたが、今後は加えて経済的基盤の確立を目指す

近年に至って、国際社会は世界全体の持続可能性が目指すべきところであり、それを実現する目標としてSDGs（持続可能な発展目標）を作成した。しかし、世界全体が持続可能であるためには、それを構成する地域社会自体がある程度、自立的に独自に持続可能でなければならない。地域社会が持続可能でないのに、世界全体が持続可能になるという事態は理論的には構想できるかもしれないが、非現実的で絵に描いた餅である。

筑後川流域では、久留米大学とNPO法人筑後川流域連携倶楽部が中心になって、国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所、流域自治体、流域の企業、それに（一社）北部九州河川利用協会、流域民間活動団体などが連携して、筑後川流域を一体的にとらえ、持続可能で質の高い生活の実現を目指してきた。「筑後川フェスティバル」、「筑後川新聞」、「筑後川まるごと博物館」、「筑後川まるごとリバーパーク」、「筑後川ブランド」、「筑後川竹筏レース」などの事業・イベントなどを実施し、それらを「筑後川プロジェクト」と総称している。

筑後川プロジェクトは、環境保全、文化の向上、社会的連携などを総合的に推進し、筑後川流域の環境価値、文化的価値、社会的価値を高めてきた。しかし、経済振興に関しては流域全体を対象にしたマクロ的レベルにとどまり、ミクロレベルでの個々の事業体とのかかわりは充分でなかった。持続可能で質の高い生活の実現は総合的なものであるが、経済的基盤が確立していないと持続可能性は担保されない。この目的のために一般社団法人筑後川プロジェクト協会を立ちあげた。この目的は、「筑後川プロジェクト」が生み出す環境価値、文化的価値、社会的価値を経済的価値に転換し、経済的基盤の確立を目指し、それをまた「筑後川プロジェクト」にフィードバックさせるものである。

日本水大賞は素晴らしい企画だと実感できるが、民間一般市民の認知度は今一つ高く感じられる。認知度を高める手段として、地域別に（例えば九州でとか）今まで受賞した団体の活動発表会などを開催するのも一案だと思う。



第29回 筑後川フェスティバル in 玖珠町



筑後川新聞100号の1頁

## 第19回 日本水大賞 (2017年)

### 創作劇「とこしま堰物語」の公演活動

～地域の資源 (筑後川) を活かした教育活動～

久留米市立金島小学校

#### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について

##### 身近な郷土の遺構を題材に児童劇の公演を続ける

金島小学校がある筑後川中流域では、約300年前に五人の庄屋が立ち上がり、床島堰を築造して人々を干害から救い、豊かな実りをもたらした。本校では、全児童が筑後川や床島用水・堰等を学習し、五庄屋をモデルとした創作劇「とこしま堰物語」の上演を平成8年から20年以上に渡り続けている。

子どもたちが故郷の筑後川を題材に、先人の偉業を学び、劇を上演するという活動は、水とともに生きてきた日本や地域の特色を実感できるものであり、長年継続されていることが評価され、栄えある大賞の授与となった。

#### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について

##### 児童数の減少と教育環境の変化で継続の危機に直面していた

平成8年から続けてきた公演活動だが、近年、マンネリ化や継続の危機もあった。その要因は、児童数の減少、教育環境の変化(窮屈な教育課程、外国語活動の導入など)とそれらに伴う教職員の多忙感、保護者負担の増加、ボランティアスタッフの高齢化などである。しかし、この受賞によって、自分たち、そして先輩達の活動の意義やすばらしさを再確認できた。また、それが広く広報されたことで児童、保護者だけでなく、地域の方々からも「金島の誇りである」と祝福の声をいただいた。

時あたかも平成29年7月(表彰式・活動報告会の約1週間前)は九州北部豪雨が襲い、すぐ上流の朝倉・日田の地は甚大な被害に見舞われた。自然の驚異と恵みについて子どもたちと改めて考え、そしてそれらと闘ってこの地を拓いてきた先人達に想いを馳せて、22回目の上演活動に取り組んできた。

#### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組みについて

##### 多くの方々から激励され、意気の高揚と誇りにつながっている

表彰式が行われた週の土曜日(7月15日)に、筑後川防災施設「くるめウス」で受賞報告会が行われた。本校の5年生が参加して「筑後川と共に生きる～とこしま堰物語」と題して発表した。参加していただいた九州地方整備局長(当時:増田博行氏)からは、本校校歌の「『鉄より堅き意志』を持って成長してってください。」と、また久留米市長(当時:楢原利則氏)からは、「自分も床島堰に近い地で育ち、五庄屋の学びが残っている。それが人間的財産となっている。ふるさとを思いながらすばらしい人材として成長し、未来の久留米を支えてってください。」という言葉を送った。本校児童の一人は「昔の人の苦勞のおかげで、おばあちゃんは農業ができる。劇ができることを誇りに思います。」と語っている。

11月17日には、第22回目の公演を行った。6年児童は「1年生から6年生までみんなで劇を作る。1年生が見て、ぼくたちもがんばろうって思ってもらえるような劇にしたい。」と意気込んでいた。多くの観衆からは「例年以上にすばらしい出来でしたよ。」という言葉がたくさんかけていただいた。また、当日は、劇終了後に地元で「受賞祝賀会」が開催された。平成8年の公演開始時からの歴代の校長、6年生担任、そして演じた子供たち(もう大人になっているが)、そして地域の方々がお祝いに駆けつけ、受賞への喜びの声と当時の思

い出を語り合い、会場は和やかに暖かさと懐かしさに包まれていた。

#### ④ 日本水大賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか 郷土の歴史や風土を通じて交流の輪が広がり、児童の成長に総合的に働きかけた

大賞受賞が新聞で報道された数日後、地域のご高齢の方が花束を持って来校された。お話をうかがうと、「第1回からボランティアスタッフを続け、受賞の報を聞き、喜びでいてもたってもいられなかった。」と述べられた。ここ数年は、家庭と健康等の事情で、スタッフをやめていたが、「今年からまた参加します。」とおっしゃっていただいた。この受賞が、児童、保護者、卒業生だけでなく地域の方々に希望と誇りを与えていることを改めて感じた。

大賞受賞後の初公演(22回目)、会場の大ホールは立ち見が出るほどの満員だった。緊張感を持ちながら、約1時間半の上演をやり遂げた子どもたちの顔は、満足・高揚・充実感・達成感で満ちあふれていた。会場には、五庄屋さんの子孫の方もいらっしやった。

1年が過ぎた今、平成30年9月、4年生は見学などを通して、床島用水や五庄屋のことを調べている。5年生は、劇を盛り上げる音楽隊(演奏と歌)の練習に取りかかっている。そして6年生は、新たな自分たちの「とこしま堰物語」を創り出していこうと日々奮闘しているところである。

この賞が私たちに夢と希望、そして誇りを与えてくださったことに感謝申し上げたい。



第22回「とこしま堰物語」上演の様子  
筑後川をせき止めようと巨石を運ぶ村人たち  
平成29年11月18日  
久留米市北野生涯学習センター 大ホール



受賞記念碑と校舎に掲げられた横断幕



フィナーレ 全校児童による校歌の合唱

## 第20回 日本水大賞 (2018年)

# 次世代を担う子どもが安全に楽しく川の恵みを楽しむことができる社会の推進

——— 特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会 (River Activities Council 略称RAC)

### ① 日本水大賞受賞当時の活動内容について

#### 開始から20年を経て定着と成果を実感できるようになった

日本水大賞を受賞できたのは、子どもたちを安全に川へ誘うことができる指導者の育成を続けてほぼ20年を迎えた時のことである。指導者 (RACリーダー) が6,000名以上、加盟する団体は100団体を超え、ようやく全国で活動が定着したと実感できた頃である。受賞の頃には、指導者の育成のみならず、学校との連携を進めての活動、加えて水難事故防止の要であるライフジャケット着用の推進など、多岐にわたる活動が行われるようになり、国土交通省の支援を得ながら、川の活動に適する安全なライフジャケットの認定基準を策定するに至った。

### ② 受賞当時の諸活動をめぐる社会状況について

#### 水辺の活動を体験する機会が増えた一方、水難事故も多発していた

河川法が改正されて、水辺のレクリエーションやスポーツが以前より盛んになり、水辺の活動を体験する機会が増えていた。しかし、市民が親しむ川や水辺では危険性やそれにもなう安全対策が十分に意識されていたとは言いがたく、水難事故が多く発生している状況であった。私たちの活動は平成9年河川法が改正されたことを契機に始まったが、20年後となる現在でも未だ以って水難事故が後を絶たないという現状である。また、その当時と比べてみれば気候変動が激しく、豪雨などによる大規模な災害は頻発している。このような環境の変化に応じて、地域の防災活動や学校教育の場ではこれまで以上に川やその流域についての話題が耳目を集めるようになった。しかし、その反面で「川に学ぶ社会」を、という開設当時打ち出された川への認識が社会全体を通して薄れてきているのではないだろうか、と感じる。

### ③ 受賞後の活動実績とそこで直面した課題とその解決に向けた取り組みについて

#### 学校と連携し体験活動の機会を増やす工夫を考える

川に学ぶ社会を実現するためには、子どもたちが川や水に親しみ、体験することを通じて生きていく力を養い次世代につなげていく必要がある。川の恵み、怖さ、楽しさなど川に対する理解と認識を得て水辺を体験するには、川の仕組みやリスクを理解し、川での活動を適切に指導できるような指導者が不可欠なのである。RACは日本で唯一川の指導者を養成する機関である。RACでは、川の指導者育成・認定システムを創設し、これまで約6,000名以上の指導者を養成した。RACで養成された指導者は全国各地の川や学校等で行なわれる環境学習や体験活動を指導している。また、合わせてライフジャケットの着用普及を推進し、安全な河川の利用や防災教育についても自治体や河川管理者、報道機関等と協働し、水難事故の防止に努めている。

「日本水大賞」を受賞してからは、今まで以上に「川に学ぶ社会」に対する認識を社会に広く浸透させていくことの重要性を痛感している。しかし、その一方で全国に100を超す活動団体が加盟しているものの当NPOの活動だけでは、全国津々浦々の国民に広く呼びかけ普及を図って行くことに、限界を感じているところもある。

今後は、「川に学ぶ社会」の実現に際してより多くの人々が「川に学ぶ体験活動」に参加し活動できるような機会を多く提供し、これまで以上に安全管理と水辺の活動を的確に指導できる指導者の育成活動を進展さ

せて全国の河川管理者、学校・教育関係者、自治体の職員等、水辺で活動する多くの人々との連携を図っていくために工夫を重ねているところである。

#### ④ 日本水大賞がその後の活動にどのような影響を及ぼしたか 全国100を超す加盟団体が活動しているので反響が大きく励みになっている

今回、「日本水大賞」を受賞したことを感謝している。RAC に所属しているNPOの職員、役員はもとより全国で活動する100を超す加盟団体、そして、多くの指導者が活動の重要性や社会的な意義を再認識するよい機会となった。水大賞の受賞は今後の活動を進める上で大きな励みになる。是非ともこのような水環境に関わる活動を顕彰する機会を今後も継続し、全国の水環境等の活動を実践している多くの人々の励みになるようお願いしたい。

また、この賞を受賞した各団体の活動を広報できる機会を多く作っていただきたいと願う。

#### ⑤ その他自由記述（活動のPR、日本水大賞への意見など） 受賞によって社会的意義を再認識し、今後の活動につなげたい

日本水大賞という栄えある賞を受け光栄である。賞の受賞は、活動をともにする全国の仲間たちにとって、これまでの活動を振り返るよい機会になったと同時に自分たちの活動の社会的な意義を再認識することができた。また、新たな課題も明確になり、今後の活動につなげたいと思う。

今後も引き続き「川に学ぶ社会」の推進にご支援、ご鞭撻をいただき、より一層活動を発展させて行きたい。



国土交通大臣賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)	鶴見川流域における ネットワーキング活動	神奈川県	鶴見川流域ネットワーク
第2回 (2000年)	水が育む子どもたち -川遊びでの歓声と感謝-	熊本県	あいだ保育園
第3回 (2001年)	水を活かしたまちづくり活動	徳島県	特定非営利活動法人 新町川を守る会
第4回 (2002年)	生き物豊かな福島潟自然学習園の 創造と潟の環境保全・普及活動	新潟県	ねっとわーく福島潟
第5回 (2003年)	民間まちづくり会社とNPOによる 御祓川再生事業	石川県	株式会社 御祓川
第6回 (2004年)	「大川倉橋結法」伝承活動	山梨県	山梨市立日川小学校 [日川地区少年水防隊]
第7回 (2005年)	県境を越えた「北上川自然環境園」 づくりへの挑戦	岩手県	北上川流域市町村連携協議会
第8回 (2006年)	様々な立場の人が集う大都市河川・ 荒川における合意形成手法	東京都	特定非営利活動法人 あらかわ学会
第9回 (2007年)	河川環境資源の活用と地域活性化に 向けた活動(最上川流域において)	山形県	米沢中央高等学校 科学部
第10回 (2008年)	市民と行政の協働による 寝屋川市内水辺の再生	大阪府	ねや川水辺クラブ
第11回 (2009年)	子ども水防団の訓練 安全に避難する 為の避難体験学習会の開催	北海道	河川愛護団体 リバーネット 21 ながめま
第12回 (2010年)	水めぐるまち！次世代の未来を築く 水循環プロジェクト	香川県	香川県 多度津町
第13回 (2011年)	荒川発！主体間連携によるパート ナーシップを実現した環境保全活動 ～過去16年の軌跡と飛躍する 17年目のクリーンエイド～	東京都	特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム
第14回 (2012年)	身近な水環境の全国一斉調査 ～笑顔でつなぐゆたかな水辺～	東京都	全国水環境マップ実行委員会
第15回 (2013年)	遠賀川の再生を目指して ～森・川・海の連携～	福岡県	遠賀川流域住民の会
第16回 (2014年)	鳥取市の中心市街地を流れる 袋川の水環境保全活動	鳥取県	袋川をはぐくむ会
第17回 (2015年)	「川づくりは人づくり」～市民に よる川づくり 遠賀川夢プラン～	福岡県	直方川づくり交流会
第18回 (2016年)	美しい山形の海を取り戻すための 地域連携活動	山形県	特定非営利活動法人 パートナーシップオフィス
第19回 (2017年)	“次世代へ繋ぐ”利根川水圏交流連携 ～交流人口拡大と舟運ネットワーク 創出がもたらす地域活性化～	千葉県	PFI 佐原リバー株式会社
第20回 (2018年)	Yahoo! JAPANの河川防災への 取り組み～犠牲者ゼロ・逃げ遅れ ゼロを目指した河川情報の提供～	東京都	ヤフー株式会社

※第1～2回は、建設大臣賞(当時) ※活動主体は、受賞当時の名称

環境大臣賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)	淡水に生息する生物の生態や 増殖研究	富山県	清光学園岡岡谷高等学校 理科部
第2回 (2000年)	パートナーシップによる「水の都・ 三島」の水辺・自然環境再生活動	静岡県	三島ゆうすい会
第3回 (2001年)	都市河川河口部における汽水域 生態系復元に関する活動・研究	神奈川県	特定非営利活動法人 よこはま水辺環境研究会
第4回 (2002年)	化学クラブの活動を通じた 水質浄化への取り組み	広島県	私立広島学院高等学校化学部
第5回 (2003年)	科学読み物集「千曲川」の 編集・発行	長野県	飯水教育会自然調査研究委員会
第6回 (2004年)	富士山南麓の地下水 -柿田川地下川到達日数算定と応用-	静岡県	三島自然を守る会
第7回 (2005年)	都立水元公園にパトローネを利用 した実験場を創り水質浄化する活動	東京都	東京都葛飾区立水元中学校 環境科学部
第8回 (2006年)	愛媛県伊予郡松前町塩屋海岸にお ける絶滅危惧海浜植物群落の保全活動	愛媛県	愛媛県立伊予農業高等学校 伊予農絶滅危惧海浜植物群 保全プロジェクトチーム
第9回 (2007年)	ふゆみずたんぼを利用した 環境と暮らしの再生プロジェクト	宮城県	NPO法人 田んぼ
第10回 (2008年)	石狩川が育んだ泥炭の湿原を守る ナショナル・トラスト運動! (線路福移湿原の再生)	北海道	NPO法人 カラカナイトンボを守る会 ～あいあい自然ネットワーク～
第11回 (2009年)	庄内川・矢田川流域の 河川浄化・環境整備活動	愛知県	矢田・庄内川をきれいにする会
第12回 (2010年)	岐阜県関市および美濃市における ウンモツゴ(絶滅危惧種ⅠA類)の 保護と野生復帰	岐阜県	岐阜・美濃生態系研究会
第13回 (2011年)	日本まると海底、湖底、海浜清掃	神奈川県	海をつくる会
第14回 (2012年)	久保川イーハートブ自然再生事業	岩手県	久保川イーハートブ 自然再生協議会
第15回 (2013年)	水と共に生きる大野市の活動 ～井戸枯れから始まった 地下水保全の取り組み～	福井県	福井県 大野市
第16回 (2014年)	猪苗代湖の水質保全のための 水生植物等回収活動	福島県	清らかな湖、美しい猪苗代湖 水環境研究協議会
第17回 (2015年)	よみがえれ、イタセンパラ! ～生物多様性保全の取り組み～	大阪府	淀川水系イタセンパラ保全 市民ネットワーク
第18回 (2016年)	地域協働で水の都・三島の水と 緑のネットワークを創造	静岡県	特定非営利活動法人 グラウンドワーク三島
第19回 (2017年)	多様な命 つながる九頭竜川へ～サク ラマスを河川環境の指標として～	福井県	サクラマス・レストレーション
第20回 (2018年)	よみがえれ! 駒生川 手作り魚道が 生み出す生物多様性	北海道	駒生川に魚道をつくる会

※第1～2回は、国務大臣環境庁長官賞(当時) ※活動主体は、受賞当時の名称

厚生労働大臣賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)			
第2回 (2000年)			
第3回 (2001年)	名取川河畔に野鳥の森作り	宮城県	太白山ふれあいの森協会の会
第4回 (2002年)	比謝川を、かつてのような 清流の川に蘇生させる活動	沖縄県	比謝川をそ生させる会
第5回 (2003年)	水みちの調査研究活動	東京都	水みち研究会
第6回 (2004年)	琵琶湖淀川水系の水質保全と次世代 の育成を目的とした水質調査活動	大阪府	淀川水系の水質を調べる会
第7回 (2005年)	多摩川およびその流域の 環境浄化の促進	東京都	財団法人 とうきゅう環境浄化財団
第8回 (2006年)	筑後川まるごと博物館	福岡県	「筑後川まるごと博物館」 運営委員会
第9回 (2007年)	水の環から人の輪へ ∞命をつなぐ防災井戸∞	兵庫県	加古川グリーンシティ防災会
第10回 (2008年)	木津川とその支流の水質調査活動、 及びその普及による水環境保全活動	京都府	京都府立木津高等学校 化学クラブ
第11回 (2009年)	「水の文化」の普及啓発活動	東京都	ミツカン 水の文化センター
第12回 (2010年)	琵琶湖の20年後の水質保全を目指 して一調査研究活動と環境学習講座 開催	兵庫県	琵琶湖市民大学
第13回 (2011年)	鳥取県西部域の水資源保全・河川文化伝 承活動と日野川流域憲章制定の取り組み	鳥取県	日野川の源流と流域を守る会
第14回 (2012年)	多摩川源流体験教室～未来を拓く たくましい子どもたちのために～	山梨県	多摩川源流研究所
第15回 (2013年)	多摩川水源森林隊による 民有林の再生	東京都	東京都水道局 多摩川水源森林隊
第16回 (2014年)	「水はみんなの命」一熊本の水資源 愛護啓発プログラム の映像製作と 啓発啓蒙活動	熊本県	公益財団法人 肥後の水とみどりの愛護基金
第17回 (2015年)	川井浄水場再整備による 環境に配慮した水道システムの実現	神奈川県	横浜市水道局
第18回 (2016年)	水道08よ! 立ち上がり!!	千葉県	NPO法人 水道千葉
第19回 (2017年)	ネットワーク活動でアジア地域に 安全な水を広げよう	東京都	WaQuAC-NET
第20回 (2018年)	国際赤十字の災害対応における給水・ トイレ・避難支援技術の研究開発と その実証	熊本県	熊本赤十字病院

※活動主体は、受賞当時の名称

農林水産大臣賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)			
第2回 (2000年)			
第3回 (2001年)			
第4回 (2002年)			
第5回 (2003年)			
第6回 (2004年)	水循環型営農運動	熊本県	白川中流域水土里ネット協議会
第7回 (2005年)	21世紀土地改良区創造運動	栃木県	那須野ヶ原土地改良区連合
第8回 (2006年)	農業用水の機能維持増進活動	岩手県	胆沢平野土地改良区
第9回 (2007年)	田園空間ネットワーク～「日本酒 づくりで播磨の自然を育む農法」の 取り組みについて～	兵庫県	兵庫県立播磨農業高等学校 稲作研究班
第10回 (2008年)	佐久市十二新田地蔵池に生息する 絶滅危惧種オオカウキクサの保護と 農業利用に関する研究と普及啓蒙活動	長野県	長野県白田高等学校 環境緑地科農業クラブ
第11回 (2009年)	よみがえれ!水よ!! 一産官学連携によるカキ殻とモミ殻を 活用した水浄化技術開発	宮城県	宮城県石巻工業高等学校
第12回 (2010年)	兵庫県東播磨地域における ため池の水環境保全活動	兵庫県	明石工業高等専門学校 建築学科工藤研究室
第13回 (2011年)	伊豆沼・内沼・および伊豆沼・内沼上 流域、周辺水田の自然生態系保全活動	宮城県	ナマズのがっこう
第14回 (2012年)	「春の小川」の生きものを大切にす る住民参加型活動の全体的な取り組み	栃木県	メダカ里親の会
第15回 (2013年)	いなみ野ため池ミュージアム	兵庫県	いなみ野ため池ミュージアム 運営協議会
第16回 (2014年)	県絶滅危惧種オオカウキクサの 農業利用地域連携	長野県	長野県白田高等学校 グリーンライフ科 農業クラブ
第17回 (2015年)	高校生による美ら島プロジェクト～赤土 流出を防ぎ、自然環境保全への取り組み～	沖縄県	沖縄県立八重山農林高等学校 環境工学科
第18回 (2016年)	多摩川源流大学による源流域の 自然保全活動及び教育活動	東京都	東京農業大学
第19回 (2017年)	震災復興へ向けた取り組みを 自分たちの手で	福島県	福島市立渡利中学校 科学部
第20回 (2018年)	築350年の堰、地域の宝を 未来に継ぐ	福岡県	山田堰土地改良区 (水土里ネット山田堰)

※活動主体は、受賞当時の名称

日本水大賞 各賞 歴代受賞者一覧②

文部科学大臣賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)			
第2回 (2000年)			
第3回 (2001年)			
第4回 (2002年)			
第5回 (2003年)			
第6回 (2004年)	総合学習「命あふれる西通川にしたい」	山形県	山形県遊佐町立西遊佐小学校 第6学年
第7回 (2005年)	「豊かな水辺環境を守る心を、世界と分かち合う国際環境教育」	宮城県	宮城県気仙沼市立面瀬小学校
第8回 (2006年)	北六 梅田川プロジェクト～ITを活用し、豊かな体験活動を取り入れた環境交流学習～	宮城県	宮城県仙台市立北六番丁小学校
第9回 (2007年)	水(共)に生きる!～暑くなる日本の環境を守る高校生と企業の挑戦～	京都府	京都府立桂高等学校草花クラブ 東亜システムプロダクツ(株) (有) 笹井製作所
第10回 (2008年)	知ること、伝えること、守ること～身近な水辺の現状調査の結果を、市民啓発に活かし、保全活動につなげていく活動～	福岡県	福岡県立北九州高等学校 魚部
第11回 (2009年)	水辺の命を守る(水辺の命をつなぐ出前授業)	京都府	ノートルダム女学院高等学校 科学クラブ
第12回 (2010年)	ネコギギの好適生息区間～鈴鹿川水系の環境調査Ⅶ～	三重県	鈴鹿高等学校 自然科学部
第13回 (2011年)	アマモマーメイドプロジェクト	福井県	福井県立小浜水産高等学校 ダイビングクラブ
第14回 (2012年)	大谷ハチドリ計画～津波からよみがえった「ふゆみずたんぼ」と豊作になった米づくり～	宮城県	気仙沼市立大谷小学校 気仙沼市立大谷中学校
第15回 (2013年)	芦田川水系における環境保全活動～絶滅危惧種スイゲンゼニナゴ保護を中心に～	広島県	進達中学高等学校 環境科学研究部
第16回 (2014年)	北九州 平尾台カラストにある 広谷湿原の再生活動	福岡県	学校法人東筑紫学園 東筑紫学園高等学校 理科部 広谷湿原保全プロジェクト
第17回 (2015年)	耐塩芝と塩を利用した河川・沿岸堤防の緑化	京都府 宮城県	京都府立桂高等学校 宮城県小田原農林高等学校
第18回 (2016年)	福島原発事故後の茶屋沼の環境と微小生物～微小生物による汚染水から放射性物質の除去の可能性～	福島県	福島成蹊高等学校 自然科学部
第19回 (2017年)	地域と歩む麻機遊水地保全活用プロジェクト「麻活」	静岡県	静岡県立静岡北特別支援学校
第20回 (2018年)	森里海の繋がりから見えてきたニホンウナギと私たちの未来～特別採捕・飼育・放流から～	福岡県	福岡県立伝習館高等学校 生物部

\*活動主体は、受賞当時の名称

経済産業大臣賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)			
第2回 (2000年)			
第3回 (2001年)			
第4回 (2002年)			
第5回 (2003年)			
第6回 (2004年)			
第7回 (2005年)			
第8回 (2006年)	シャープ亀山工場における製造工程排水の100%リサイクル	三重県	シャープ株式会社 AVC 液晶事業本部 (亀山工場)
第9回 (2007年)		(該当なし)	
第10回 (2008年)	水環境と生態系の回復を目指した水域の富栄養化をくい止めるための意識啓発活動等	愛知県	フジグリーン工業株式会社
第11回 (2009年)	マイクロ水力発電事業「Aqua μ」	東京都	東京発電株式会社
第12回 (2010年)		(該当なし)	
第13回 (2011年)	利根川源流域における100年にわたる水源涵養の森づくり	群馬県	磯村産業株式会社及び 磯村豊水機工株式会社
第14回 (2012年)	サントリー天然水の森～水源涵養活動・水科学研究・愛鳥活動・次世代環境教育「水育」～	東京都	サントリーホールディングス株式会社
第15回 (2013年)	環境及び生物多様性の保全・啓発活動を通じた水循環の健全化	大阪府	シャープ株式会社
第16回 (2014年)	工場内の水エネルギーを活用した小水力発電装置の開発と実装	愛知県	小島プレス工業株式会社
第17回 (2015年)	地域の水環境保全を支援するCSR活動「お茶で琵琶湖を美しく、お茶で日本を美しく」プロジェクト	東京都	株式会社伊藤園
第18回 (2016年)	「AQUA SOCIAL FES!」	東京都	株式会社 トヨタマーケティングジャパン
第19回 (2017年)	循環型環境ストレスフリーを実現したタオル生産プロセスの構築	大阪府	株式会社 スマイリーアース
第20回 (2018年)	ヨシでびわ湖を守るリエデンプロジェクト	滋賀県	株式会社 コクヨ工業滋賀

\*活動主体は、受賞当時の名称

市民活動賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)	水環境の保全と再生・水文化の再構築継承発展	福岡県	広松 伝
第2回 (2000年)	湖と森と人を結び霞ヶ浦再生事業「アサザプロジェクト」	茨城県	霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議
第3回 (2001年)	山下公園海底清掃大作戦	神奈川県	海をつくる会
第4回 (2002年)	栃木県におけるメダカを指標生物とした水辺生態系の保全活動と環境学習	栃木県	メダカ里親の会
第5回 (2003年)	ニッポンバラタナゴの保護と環境保全	大阪府	ニッポンバラタナゴ高安研究会
第6回 (2004年)	モクスガニの養殖と河川生態系の保全	岩手県	特定非営利活動法人 北上川流域河川生態系保全協会
第7回 (2005年)	広げよう緑の仲間たち～子供たちと私達の明日のために～	熊本県	特定非営利活動法人 大明水の会
第8回 (2006年)	相模川流域における不法投棄ごみ対策活動と子どもたちへの環境学習	神奈川県	特定非営利活動法人 相模川倶楽部
第9回 (2007年)	名古屋市堀川の埋もれた水文化の復興と継承活動による地域づくり	愛知県	特定非営利活動法人 堀川まちネット
第10回 (2008年)	アマモ場再生による海辺のまちづくり	神奈川県	金沢八景～東京湾アマモ場再生会議
第11回 (2009年)	不老川の河川浄化活動	埼玉県	不老川をきれいにする会
第12回 (2010年)	多面的協働による流域学習の総合的推進	神奈川県	特定非営利活動法人 鶴見川流域ネットワーク
第13回 (2011年)	長野市松代町内の河川愛護活動	長野県	松代町河川愛護会
第14回 (2012年)	著作・演劇などによる水環境の浄化運動	千葉県	山本 鮎太郎
第15回 (2013年)	鴨川納涼・鴨川茶店等の多彩な河川活用活動	京都府	鴨川を美しくする会
第16回 (2014年)	市民による流域の健やかな水ネットワーク保全活動	埼玉県	NPO 法人 水のフォルム
第17回 (2015年)	綾瀬川、ともに歩んで19年	埼玉県	綾瀬川を愛する会
第18回 (2016年)	地域の中で一人一人が参加する環境保全型街づくり	千葉県	特定非営利活動法人 せっけんの街
第19回 (2017年)	余笹川をフィールドにした新たな水文化創造活動	栃木県	余笹川流域連携ネットワーク
第20回 (2018年)	「大淀川」流域に水源の森を～未来の子どものための1000年プロジェクト	宮崎県	特定非営利活動法人 どんぐり1000年の森をつくる会

\*活動主体は、受賞当時の名称

国際貢献賞 歴代受賞者

回	活動の名称	都道府県	活動主体
第1回 (1999年)		(該当なし)	
第2回 (2000年)		(該当なし)	
第3回 (2001年)		(該当なし)	
第4回 (2002年)	フィリピン・イフガオアシン川流域無灯火村に小規模水力発電を設置する活動	神奈川県	イフガオ・アシン川流域に小規模水力発電を設置する会
第5回 (2003年)		(該当なし)	
第6回 (2004年)	ユース世界水フォーラム	京都府	Youth Water Japan
第7回 (2005年)	途上国に適用可能な下水処理技術の現地一体型国際共同開発	新潟県	国立大学法人長岡技術科学大学環境・建設系 水環境研究室 (原田研究室)
第8回 (2006年)		(該当なし)	
第9回 (2007年)	先人の知恵「上総掘り」を海外へ(生活用水確保のための井戸掘り)	千葉県	上総掘りをつたえる会
第10回 (2008年)		(該当なし)	
第11回 (2009年)	ラオスへの日本の河川伝統工法(粗朶工法)の導入と展開	東京	国建協ラオス粗朶工法調査団
第12回 (2010年)	地球水循環統合観測と利用実証の推進	東京都	地球エネルギー・水循環統合観測国際調整部会 (CEOP/ICB)
第13回 (2011年)	甞れ!! 魚たち～紫川再生の経験をフィリピンに移転した～	福岡県	紫川を愛する会 We Love Murasaki River (WLMR)
第14回 (2012年)	津波被災のための数値解析技術の世界展開	宮城県	東北大学災害制御研究センター 津波工学研究分野
第15回 (2013年)	命の水のパイプライン～湧水から学校へ～	千葉県	上総掘りをつたえる会
第16回 (2014年)	バングラデシュの飲み水の危機を救う天水活用推進 住民主体による小規模流域管理と森林再生を通じた共有資源の管理とコミュニティ開発	静岡県 岐阜県	村瀬 誠 特定非営利活動法人 ソムニード
第17回 (2015年)	アジア地域に適した住民参加型コミュニティ排水処理システムの開発と普及	東京都	特定非営利活動法人 APEX
第18回 (2016年)	中東オマーンにおける石油随伴水からの新規水資源の創出～石油随伴水で砂漠を緑に～	東京都	清水建設株式会社
第19回 (2017年)	フィリピンで有機農業を広め、水源の森を守ろう!	愛知県	特定非営利活動法人 イカオ・アコ
第20回 (2018年)	日本及びアジアの河川再生の担い手をつなぐ協働基盤構築	東京都	日本河川・流域再生ネットワーク

\*活動主体は、受賞当時の名称

奨励賞・未来開拓賞・審査部会特別賞 歴代受賞者

回	奨励賞 (第1～12回) 未来開拓賞 (第13～20回)				審査部会特別賞		
第1回 (1999年)	神奈川県南足柄市	羽生三洋電子株式会社	米沢中央高等学校 科学部	白山川を守る会	豊田市立西広瀬小学校		
	みやぎ生活協同組合						
第2回 (2000年)	長野県富士見高等学校 農業クラブ環境保護会	熊本県矢部町 入佐駐在区	ハヶ岳観光協会	市民ネット ワーキング・ 相模川	ときめきダンス カンパニー四国		
	岡山淡水魚研究会	丹南地域環境 研究会	智頭町親水公園 連絡協議会				
第3回 (2001年)	高松市立栗林小学校	シャープ株式 会社三重工場	五十嵐新三	酒匂川水系 保全協議会	高梁川流域連盟		
	リュウキュウアユを 蘇生させる会						
第4回 (2002年)	茨城県立土浦第二 高等学校化学部	コニカ株式会社 小田原事業場	油藤商事 株式会社	日本黒部 学会	多摩川癒しの会		
	HAB21 イルカ研究会						
第5回 (2003年)	千葉県立茂原農業 高等学校農業土木部	小出川に 親しむ会	鴨と蛸の里 づくりグループ		ウォーター ネットワーク		
第6回 (2004年)	東京大学 生産技術 研究所沖・鼎研究室	新潟県粗朶業 協同組合	滋賀県琵琶湖 研究所	魚野川を 育む会	PHスタジオ		
	伊那テクノバレーリサ イクルシステム研究会	榎尾ルネッサン ス103					
第7回 (2005年)	みやぎ生活協同組合	特定非営利活動 法人パートナー シップオフィス	田倉川と暮らし の会	特定非営利活 動法人斐伊川 流域環境 ネットワーク	就実高等学校 放送文化部	全国管工事業協 同組合連合会 青年部協議会	
第8回 (2006年)	兵庫県立農業高等学校 県農ため池調査班	市川市	安倍川 フォーラム		近畿大学附属豊岡 高等学校豊岡水害 風化防止ネット	特定非営利活動 法人足尾に緑を 育てる会	
第9回 (2007年)	宮城県石巻工業高等学校 天文物理部	佐々木 久雄	隅田川市民交流 実行委員会	自然史教育 談話会	小島 貞男	鴨川を美しく する会	財団法人肥後の 水資源愛護基金
第10回 (2008年)	茨城県稲敷郡美浦村立 美浦中学校 科学部	日野市	静岡県立静岡 農業高等学校	大和信用金庫	漏船保存会	北九州市建設局 水環境課ほたる係	
第11回 (2009年)	琵琶湖お魚ネットワーク	氷見市育委員会 生涯学習課	名古屋堀川 ライオンズ クラブ	香川県立多度 津高等学校 マイコン・ 機械工作部	NPO 法人首里まち づくり研究会沖縄 南部風景街道 パートナーシップ	広島銘水研究会	橋本 夏次
第12回 (2010年)	岐阜県立恵那農業 高等学校	美しい山形・ 最上川 フォーラム	自然と暮らしを 考える研究会		小宮 康孝	合唱組曲「利根 川源流讃歌」 発表・実行委員会	財団法人 水島地域環境 再生財団
第13回 (2011年)	つくば市教育委員会	Blue Earth Project	沖縄県立 宮古総合実業 高等学校環境班		岩手県立宮古 工業高等学校 機械科 課題研究 津波模型班	おさかな ポストの会	高橋 和彦・恵子
第14回 (2012年)	群馬工業高等専門学校 環境都市工学科青井 研究室	特定非営利活動 法人河北潟湖沼 研究所	日本建設技術 株式会社		北上川リバー カルチャー アソシエーション	特定非営利活動 法人びわこ豊稜 の郷	
第15回 (2013年)	地域づくり工房	高川学園中学・ 高等学校科学部	佐賀市上下 水道局下水浄化 センター		岐阜県立岐山 高等学校生物部	佐用町久崎 自治会	飯梨川再生 ネット
第16回 (2014年)	宮城県工業高等学校	岐阜県立大垣 養老高等学校 食品化学班	京都市立伏見 工業高等学校		NPO 法人甲斐駒 清流懇話会	学校法人奈良学 園奈良学園中学 校・高等学校	
第17回 (2015年)	熊本市立天明中学校 生徒会	岐阜県自然共生 工法研究会	公益財団法人 山本能楽堂		特定非営利活動 法人グラウンド ワーク西神楽	特定非営利活動 法人風土工学 デザイン研究所	興津川保全市民 会議
第18回 (2016年)	青森県立木造高等学校 深浦校舎・青森県深浦町・ 白神の生き物を 観察する会	名古屋市立 名古屋商業 高等学校	特定非営利活動 法人国際ボラン ティア学生協会		木曾三川流域 自 治体連携会議(事 務局 名古屋市 上下水道局)	なでしこ防災 ネット	次世代のために がんばる会
第19回 (2017年)	八丈町立富士中学校 自然科学部	大阪府立富田林 高等学校科学部	水の巡回展 ネットワーク		北海道コカ・ コーラボトリング 株式会社	公益財団法人 みやぎ・環境と 暮らし・ネット ワーク	特定非営利活動 法人 e-plus 生涯学習研究所
第20回 (2018年)	愛媛県立伊予農業高等 学校伊予農希少植物群 保全プロジェクトチーム				やまかわさとみ (山川里海)		

※奨励賞・未来開拓賞・審査部会特別賞は、活動主体のみ掲載(受賞当時の名称)

# 日本水大賞20回を振り返り 分析①

～大賞受賞者のその後の活動からみえる日本水大賞が及ぼした効果とこれからの課題～

## ▶背景

河川環境の整備と保全を目的に加えた平成9年の河川法改正を機に、平成10年、水循環系の健全化に寄与する諸活動を顕彰するため、「日本水大賞」が創設された。同年、特定非営利活動促進法が制定され、河川に係る活動を行っていた市民団体の多くがNPO法人を立ち上げ、より活発な活動を展開した。現在、川や水をテーマに活動する市民団体は、約3,500団体となっている（平成30年「川や水の活動団体調査」より）。全国各地で行われているこれらの活動は、多様な価値観や立場の異なる方々が集まり、多岐にわたる活動が全国各地の河川を支えている。

一方、既存の市民団体においては、20年が経過し、活動の継続が困難な状況となっている団体が多いことも事実である。以下に活動の継続において直面する課題を挙げる。

- ・参加者が固定され、活動内容がマンネリ化し、行動意欲が低下している。
- ・参加者の高齢化や人材育成が出来ず、世代交代の難しさに直面している。
- ・資金調達の仕組みがない。

## ▶日本水大賞受賞が及ぼした効果

今回、日本水大賞大賞受賞団体へその後の活動状況について調査したところ、大賞受賞団体は今もなお、活発に活動していることがわかった。日本水大賞として水循環系の健全化に寄与する活動団体等を顕彰することで、団体や活動の価値を高め、関わる方々の行動意欲向上に繋がっている。このことから大賞受賞が、活動の継続・発展に及ぼした効果として、「①魅力」、「②組織づくり」、「③資金調達」の3つのキーワードが考えられる。

### ①魅力

- ・受賞が励みとなり、参加者の行動意欲が向上し、魅力的な活動を企画・実施し、賛同者を増やす工夫をしている。
- ・活動が拡充し、人材が集まり、新たな出会いや気づき・学び、社会的意義があることにやりがいを感じている。

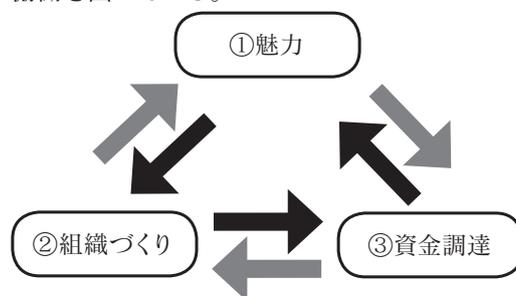
### ②組織づくり

- ・活動の魅力に賛同した地元住民やNPO、学校、企業、行政など管内の関係団体と連携し、産官学民の交流や情報交換を行うことにより、組織の活性化が図られている。
- ・多様な年代層が関わるコミュニティづくりが形成され、次世代との協働を図っている。

### ③資金調達

- ・受賞が地元の新聞社やテレビ局などで報道され、活動が広く知れ渡ったことにより、活動や団体への信頼度が増し、支援する上で安心感を与え、寄付金や助成金集めに対する理解を得やすく、安定的に資金の調達ができることを可能とした。

これらの「①魅力」、「②組織づくり」、「③資金調達」が継続されることで、水循環系の健全化に寄与する活動を活性化させ、市民団体として活動の組織運営力を高めていることが認知できる。



## ▶日本水大賞の課題

創設から20年を経て、河川に係る諸活動をしている方々や団体には関心を引いているが、民間一般市民への日本水大賞の認知度はまだ高くないといえる。

これまでの20回における3,585件の活動主体別応募件数は、表のとおりである。団体からの応募が60%を占めている。逆に少ないのは、企業（5.5%）や行政（3.9%）からの応募である。

活動分野については、次ページに示すとおり、水環境分野の応募が毎年50%程を占めている。近年では、水防災分野と第15回から項目に追加した復興支援分野の応募も少しずつ増えてきてはいるが、日本水大賞は一般的に、「環境」分野重視のイメージを持たれているといえる。今後は、水循環系の健全化における「水防災」の重要性を広める活動も行い、「企業」による防災関連の技術開発への取り組みや、「行政」による水害対策への取り組みなど、さらに裾野を広げて多様な活動を顕彰する制度として発展していく必要がある。

河川に係る活動をはじめ、水循環系の健全化に寄与する個人・団体の活動を顕彰し、活動する方々の励みとなり、その活動を社会へ情報発信するなど、日本水大賞が次世代へ果たす役割は将来ますます重要なものとなってくると考えられる。

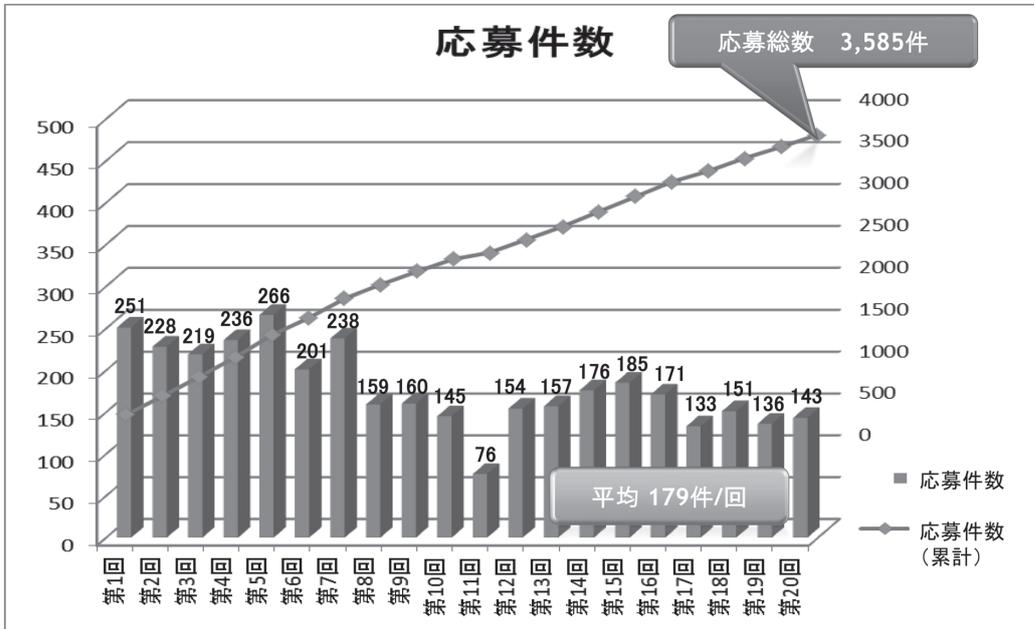
学 校	602件 (16.8%)
企 業	197件 ( 5.5%)
個 人	479件 (13.4%)
団 体	2,167件 (60.4%)
行 政	140件 ( 3.9%)
合 計	3,585件

表 第1回～20回の活動主体別応募件数

# 日本水大賞20回を振り返り 分析②

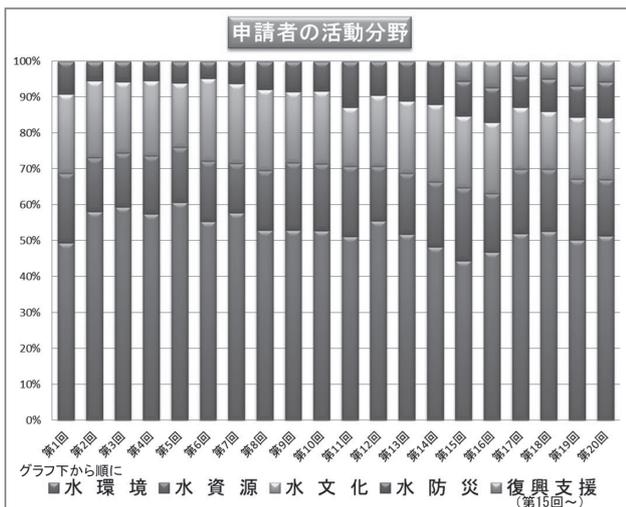
～応募件数の推移と活動分野の傾向～

## 応募件数の推移

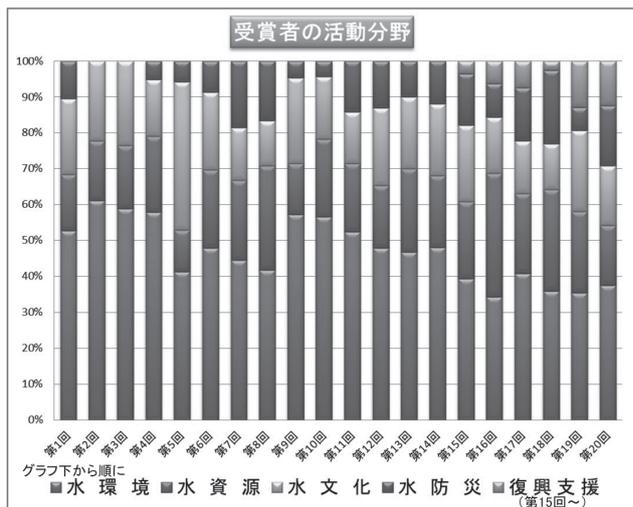


受賞者総数  
270件  
応募件数の  
7.5%

## 申請者と受賞者の活動分野の傾向



- \* 毎年、水環境を含んだ申請が50%前後と多い
- \* 次いで、水文化、水資源が20%前後で続く
- \* 第15回以降、水防災と復興支援を合わせると15%前後



- \* 受賞者の活動分野も水環境が最も多いが、全体的に申請の割合ほどではない。水資源と水文化が続き、最近では、水防災・復興支援の割合が増えている。

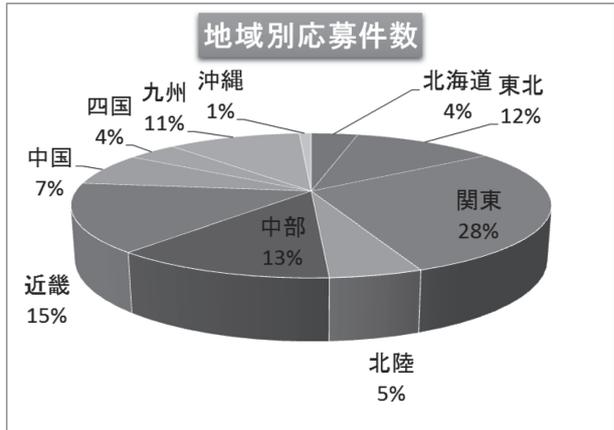
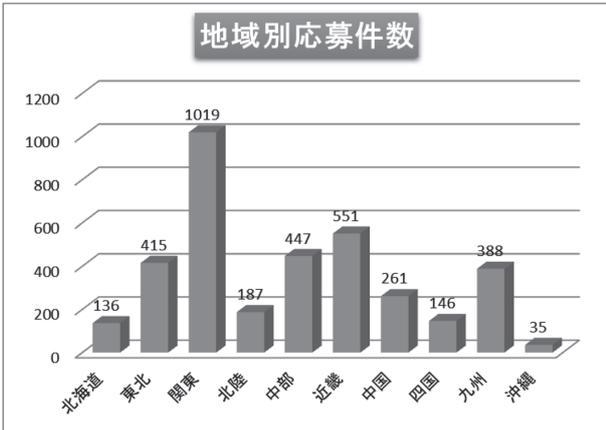
# 日本水大賞20回を振り返り 分析③

～応募の地域分布と大賞受賞者の地域分布～

## 応募の地域分布

地域別応募件数は多い順に

- ①関東 ②近畿 ③中部 ④東北 ⑤九州 ⑥中国 ⑦北陸 ⑧四国 ⑨北海道 ⑩沖縄



都道府県別応募件数

- ・多い順に ①東京330 ②神奈川196 ③大阪158 ④北海道136 ⑤愛知131 ⑥埼玉・千葉130 ⑧京都・福岡110  
 ・少ない順に ①徳島23 ②奈良24 ③佐賀27 ④石川・山梨28 ⑥鳥取29 ⑦高知・長崎30 ⑨鹿児島31

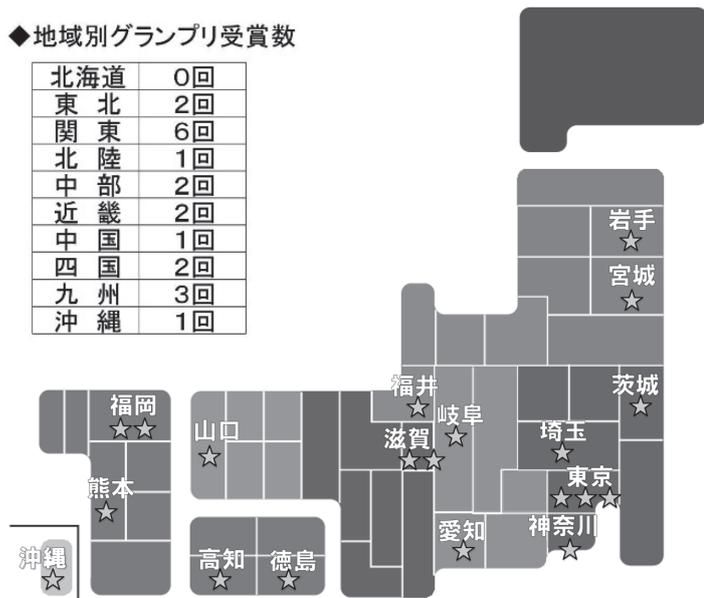
## 大賞(グランプリ)受賞者の地域分布

◆グランプリを受賞した都道府県

3回	東京
2回	滋賀
	福岡
1回	岩手、宮城
	茨城、埼玉、神奈川
	福井
	岐阜、愛知
	山口
	徳島、高知
	熊本
沖縄	

◆地域別グランプリ受賞数

北海道	0回
東北	2回
関東	6回
北陸	1回
中部	2回
近畿	2回
中国	1回
四国	2回
九州	3回
沖縄	1回



# 日本水大賞委員会 歴代委員 任期一覧

氏名	所属・職名 (就任当時)	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
		1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
		平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17
高橋 裕	世界水会議 (WWC) 理事 東京大学 名誉教授							
中川 志郎	茨城県自然博物館 館長							
老川 祥一	(株) 読売新聞社 取締役編集局長							
片倉 もとこ	中央大学総合政策学部 教授							
川那部 浩哉	琵琶湖博物館 館長							
北野 大	淑徳大学国際コミュニケーション学部 教授							
小坂 忠	(社) 日本河川協会 会長							
小谷 実可子	アーティスティック・シンクロコーチ							
小松 左京	作家							
庄子 幹雄	(社) 日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長							
鈴木 基之	国際連合大学 副学長 放送大学 教授							
松尾 友矩	東京大学大学院工学系研究科 教授 東洋大学 学長							
村岡 浩爾	大阪大学大学院工学研究科 教授 大阪産業大学人間環境学部 教授							
早川 準一	(株) 読売新聞社 取締役編集局長		早川 準一					
大内 照之	(財) 世界自然保護基金ジャパン 会長			大内 照之				
椎貝 博美	(社) 日本河川協会 会長				椎貝 博美			
須藤 隆一	東北工業大学 客員教授 生態工学研究所 代表				須藤 隆一			
石井 弓夫	(株) 建設技術研究所 会長 (株) 建設技術研究所 相談役					石井 弓夫		
進士 五十八	東京農業大学 学長 公立大学法人福井県立大学 学長					進士 五十八		
山岸 哲	(財) 山階鳥類研究所 所長					山岸 哲		
赤星 たみこ	漫画家					赤星 たみこ		
白石 興二郎	(株) 読売新聞東京本社 常務取締役編集局長					白石 興二郎		
千賀 裕太郎	東京農工大学 名誉教授					千賀 裕太郎		
虫明 功臣	福島大学理工学群 教授 東京大学 名誉教授					虫明 功臣		
大垣 眞一郎	(独) 国立環境研究所 理事長 (公財) 水道技術研究センター 理事長						大垣 眞一郎	
藤吉 洋一郎	大妻女子大学文学部 教授 元NHK解説委員						藤吉 洋一郎	
近藤 徹	(社) 日本河川協会 会長							
吉川 廣和	(社) 日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長							
竹中 統一	(社) 日本建設業団体連合会 環境委員長							
徳川 恒孝	(公財) 世界自然保護基金ジャパン 会長							
伝川 幹	(株) 読売新聞東京本社 取締役編集局長							
松田 芳夫	(一社) 全日本建設技術協会 会長 (一社) 全日本建設技術協会 技術顧問							
毛利 衛	日本科学未来館 館長							
大田 弘	(一社) 日本建設業連合会 環境委員長							
福島 秀男	(一社) 日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長代行							
浅海 保	(株) 読売新聞東京本社 常務取締役編集局長							
大橋 善光	(株) 読売新聞東京本社 専務取締役編集局長							
小川 賢治	(一社) 日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長代行							
溝口 烈	(株) 読売新聞東京本社 専務取締役編集局長							
樋口 靖	(一社) 日本建設業連合会 環境委員長							
三浦 啓一	(一社) 日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長代行							
大島 一哉	(株) 建設技術研究所 相談役							
谷田 一三	大阪市立自然史博物館 館長							
名執 芳博	NPO法人日本国際湿地保全連合 会長							
柴田 岳	(株) 読売新聞東京本社 取締役編集局長							
櫻野 泰則	(一社) 日本建設業連合会 環境委員長							

※第1～6回は、日本水大賞顕彰制度委員会 (当時)



## 日本ストックホルム青少年水大賞 (SJWP) これまでの歩み

日本ストックホルム青少年水大賞  
審査部会 部会長  
谷田 一三

日本ストックホルム青少年水大賞は、同世界大会の国内予選を兼ねています。この17年間に延べ302校に応募して頂きました。多い年で32件、少ない年だと11件の応募でした。大賞は、副賞20万円とともにストックホルムへの生徒と担当教員の渡航費も授与されます。優秀賞、審査部会特別賞にも、10万円の副賞が授与されます。もちろん、生徒や学校の大きな名誉です。このような栄誉と本選出場のチャンスを考えると、これまでの応募数はやや少ないようにも思われます。かなり大部の応募書類の提出が、応募の障壁ではないかと審査部会でも議論をしました。しかし、世界大会の基準があるために現行の応募規定になっています。

ストックホルムの本選においては、日本はグランプリ1回と準グランプリ2回を獲得してきました。グランプリ獲得はアメリカが7回と群を抜いて多く、南アフリカ、カナダ、シンガポールが各2回ですので、日本も健闘しています。受賞を逃した本選でも、日本の評判はいつも高く、僅差で受賞を逃した年も多かったと推察しています。グランプリは2004年の沖縄県立宮古農林高等学校の「宮古の水を守れ～土壌蓄積リンで環境に優しい有機肥料作り～」、準グランプリは2006年の京都府立桂高等学校の「小さなCaseの大きな可能性～究

極の水循環で90億人の食を守る～」と2018年の青森県立名久井農業高等学校の「3つの生物による水質浄化システムの開発」でした。いずれも、地元では大きな話題になりました。

応募作の研究活動にも、水問題の変遷が見られます。環境ホルモン、湖沼や湧水の水質汚濁、外来種、絶滅危惧種や貴重種、廃水などの有効活用など、多様なテーマが取り上げられてきました。その中で、貴重種や外来種は、日本固有の課題が多く、世界的な視座の必要な世界大会でのグランプリ獲得の機会が少ないと判断したこともありました。そのため、国内大会の優秀賞、審査部会特別賞に留まった学校もありました。しかし、その中には大学や研究機関のレベルを凌駕するものもありました。

多忙な高校などの生活ですが、今後ともさらに多くの、そして意欲的な日本ストックホルム青少年水大賞への応募をお待ちしています。



2018 SJWP デジタルポスターを使用した研究発表・審査の様子



ヴィクトリア皇太子殿下から表彰される (全てPHOTO:SIWI)

㊤ 2004年グランプリ宮古農林高校 (沖縄) ㊤ 2006年準グランプリ桂高校 (京都) ㊤ 2018年準グランプリ名久井農業高校 (青森)

# 日本ストックホルム青少年水大賞 歴代受賞校一覧

## 2002～2018年(応募総数:302件、受賞累計:40件)

開催年	応募数	各賞	調査活動の課題	都道府県	学校名
2002年	12件	大賞	雄メダカの乳頭状突起を指標にした試験法の評価と内分泌攪乱化学物質の組み合わせの影響	埼玉県	県立深谷第一高等学校 生物部
		審査部会特別賞	メダカ ( <i>Oryzias latipes</i> ) とカダヤシ ( <i>Gambusia affinis</i> ) の種間関係	山口県	県立厚狭高等学校 生物部
2003年	12件	大賞	低酸素濃度に対するメダカとカダヤシの耐性について	山口県	県立厚狭高等学校 生物部
		審査部会特別賞	保護池における水質の変化に伴う珪藻量の変化とそれに同調するドブガイの成長速度 - ドブガイはほんとうに珪藻を食べているのか - 佐鳴湖はなぜきれいにならないのか - 潮汐による逆流とその影響 -	大阪府 静岡県	清風高等学校 生物部 県立浜松湖南高等学校 自然科学部
2004年	15件	大賞	宮古の水を守れ ～土壌蓄積リンで環境に優しい有機肥料作り～	沖縄県	県立宮古農林高等学校 環境班
		審査部会特別賞	ヤマトシジミの復活をめざして - 佐鳴湖の浄化への挑戦 -	静岡県	県立浜松湖南高等学校 自然科学部
2005年	21件	大賞	沼地の富栄養化による植生の遷移とトンボ相の変化 - 人為的に造られた自然の多様性を維持するために -	北海道	北海道札幌拓拓高等学校 理科研究部
		審査部会特別賞	鉄バクテリアの作る沈殿物の工業化の可能性	埼玉県	早稲田大学本庄高等学院
2006年	13件	大賞	「小さな "Case" の大きな可能性」 ～究極の水循環で90億人の食を守る～	京都府	府立桂高等学校 草花クラブ
		審査部会特別賞	トウキョウサンショウウオの三面コンクリート水路での繁殖 甕れ!! 塩屋の海浜植物群落	埼玉県 愛媛県	県立松山高等学校 生物部 県立伊予農業高等学校
2007年	23件	大賞	キンタイを救う "池干し" の謎 - ニッポンバラタナゴの産卵床となるドブガイの繁殖に影響を及ぼす伝統的な "池干し" の効果 -	大阪府	清風高等学校生物部・関西大倉高等学校
		審査部会特別賞	SAVE THE RIVER SIDE II - 絶滅危惧種「サクラソウ」の増殖と保護の研究を通し水環境の保全を考える -	岩手県	県立盛岡農業高等学校 サクラソウ保護研究班
2008年	12件	大賞	オオサンショウウオの保全は水辺を守る ～放流実現に向けた遺伝子研究～	広島県	県立広島国泰寺高等学校
		審査部会特別賞	湧水の守り神、カスミサンショウウオの再生を目指して - 高地型との出会い、その再生と保護について - ノシバを用いた節水型都市緑化 ～増加する屋上緑化への警鐘! 遺伝子保護と少水緑化への挑戦～ コウノトリを救う地域独特の環境と生物多様性の再生 "ドジョウを育むビオトープ水田の施工"	山口県 京都府	高川学園高等学校 府立桂高等学校 草花クラブ・TAFF
2009年	17件	大賞	ヒメガムシを守るために ～その生態から見た生物多様性の維持の方策～	埼玉県	県立熊谷西高等学校 自然科学部 生物班
		審査部会特別賞	カワセミ ( <i>Alcedo atthis</i> ) の人工営巣場所づくりと生態・繁殖行動の研究 - 水辺にカワセミが飛び交うために -	北海道	北海道札幌旭丘高等学校 生物班
2010年	11件	大賞	巴川水域環境研究 ～ホテイアオイのつくるバイオループ～	静岡県	静岡北高等学校 科学部水質班
		審査部会特別賞	土壌から分離した6種クロム還元酵母菌 ( <i>Williopsis saturnus</i> ) の最適培養条件と透析膜を利用した還元検討 手賀沼の水質調査とプランクトンの生態と光触媒による浄化	埼玉県 千葉県	県立松山高等学校 生物部 県立柏中央高等学校 化学部
2011年	15件	大賞	水環境における外来種問題の情報ネットワーク構築	神奈川県	向上高等学校 生物部
		優秀賞	「甕れ、山口県のオオサンショウウオ」 - 川の守神オオサンショウウオと人間の共生に関する基礎研究 -	山口県	高川学園高等学校 科学部
2012年	24件	大賞	大震災を乗り越えて ～海岸のシンボル「サクラソウ」の保護と塩害花壇の再生活動～	青森県	県立名久井農業高等学校 TEAM FLORA PHOTONICS
		優秀賞	湧水を生かし、地域の生物多様性を守る場所に! ～船橋芝山高校ビオトープ「芝山湿地」における13年間の取り組み～ 瀬戸内海の海底ごみ問題の解決に向けての取り組み ～回収活動と啓発活動からのアプローチ～	千葉県 岡山県	県立船橋芝山高等学校 科学部 生物班 山陽女子高等学校 地歴部
2013年	17件	大賞	日本一暑い町・多治見を冷やす2つの機構 川と山	岐阜県	県立多治見北高等学校 自然科学部
		審査部会特別賞	水噴流による水浄化の研究	広島県	県立広島国泰寺高等学校 理数ゼミ 物理班
2014年	32件	大賞	守れ! ふるさとのカスミサンショウウオ ～保護活動と遺伝的多様性の解析～	岐阜県	県立岐阜高等学校 自然科学部 生物班
		審査部会特別賞	可視光による持続的な硝酸イオン除去法の開発	静岡県	静岡北高等学校 科学部 水質班
2015年	25件	大賞	黄金井の水環境 ～「ハケ」と共に生きる水～	東京都	都立多摩科学技術高等学校 科学部
		審査部会特別賞	決め手は地下かんがい! ～田畑輪換による環境保全型農業を目指して～	青森県	県立五所川原農林高等学校 環境土木科水循環研究室
2016年	20件	大賞	複合的水質監視装置の開発とナミウズミシの生態	山口県	県立山口高等学校 化学・生物部
		審査部会特別賞	海洋汚染源アオサのカビ酵素による糖化とその糖化液を資化できる酵母の探索	大阪府	府立園芸高等学校 バイオ研究部
2017年	13件	大賞	リン酸マグネシウムアンモニウム (MAP) を活用した革新的な堤防維持管理技術の開発	京都府	府立桂高等学校地球を守る新技術の開発研究班
		審査部会特別賞	カワナを通して考える地域の生態系	岐阜県	県立岐山高等学校 生物部 カワナ班
2018年	20件	大賞	3つの生物による水質浄化システムの開発	青森県	県立名久井農業高等学校 TEAM FLORA PHOTONICS
		優秀賞	守れ! ふるさとのカスミサンショウウオ ～GISと環境DNAを用いた新規生息地の発見～	岐阜県	県立岐阜高等学校 自然科学部 生物班

※ 2002～2004年は、青少年研究活動賞(当時) ※学校名は、受賞当時の名称

## ストックホルム青少年水大賞(国際コンテスト) 過去大会の日本代表校と受賞国一覧

西暦	参加国数	日本代表校	グランプリ	準グランプリ		
1997年			アメリカ	—		
1998年			ドイツ	—		
1999年			スペイン	—		
2000年			アメリカ	—		
2001年			スウェーデン	—		
2002年	22カ国	埼玉県立 深谷第一高等学校	アメリカ	—		
2003年	26カ国	山口県立 厚狭高等学校	南アフリカ	—		
2004年	26カ国	沖縄県立 宮古農林高等学校	日本	—		
2005年	29カ国	北海道 札幌拓北高等学校	南アフリカ	アルゼンチン	メキシコ	スペイン
2006年	29カ国	京都府立 桂高等学校	中国	日本	スリランカ	
2007年	27ヶ国	清風高等学校・関西大倉高等学校	メキシコ	中国		
2008年	30カ国	広島県立 広島国泰寺高等学校	アメリカ	ロシア	スリランカ	
2009年	29カ国	京都府立 桂高等学校	トルコ	カナダ	イスラエル	
2010年	30カ国	静岡北高等学校	カナダ	中国		
2011年	28カ国	向上高等学校	アメリカ	スリランカ		
2012年	27カ国	青森県立 名久井農業高等学校	シンガポール	チリ		
2013年	29カ国	山陽女子高等学校	チリ	イスラエル		
2014年	29カ国	広島県立 広島国泰寺高等学校	カナダ	タイ		
2015年	29カ国	東京都立 多摩科学技術高等学校	アメリカ	チリ		
2016年	29カ国	山口県立 山口高等学校	タイ	メキシコ		
2017年	33カ国	京都府立 桂高等学校	アメリカ	バングラデシュ		
2018年	32カ国	青森県立 名久井農業高等学校	シンガポール	日本		

西暦	グランプリ	研究テーマ
1997年	アメリカ	発達における変化、海洋媒体の殺虫剤にさらされたウニ <i>Lytechinus variegatus</i> 配偶子の精子活動と生殖 -105の露出範囲にわたって
1998年	ドイツ	アクアカット - 産業排水の汚染除去のための太陽光駆動の反応装置
1999年	スペイン	アルボラン海岸における水質の生物指標としての棘皮動物
2000年	アメリカ	公共水における残留抗生物質汚染と大腸菌の薬物耐性を相関づける
2001年	スウェーデン	浸出水からの金属イオンの除去
2002年	アメリカ	牡蠣によるチェサピーク湾の浄化
2003年	南アフリカ	水を賢く利用するリール園芸
2004年	日本	有機肥料 - 科学肥料の代替物 -
2005年	南アフリカ	夜間水力の最小限化
2006年	中国	都市部の河道環境を復元する包括的技術の応用研究と実践
2007年	メキシコ	卵殻を用いたバイオ吸着を介し、水から鉛(II)を除去
2008年	アメリカ	様々な環境下における銀ナノ粒子の毒性作用のモデル化
2009年	トルコ	発電由来の水汚染の解決策：雨 - 環境にやさしい代替発電資源
2010年	カナダ	ポリスチレンの新しい生分解方法
2011年	アメリカ	水質測定のためのマイクロ流体共流動素子の開発と評価
2012年	シンガポール	ナトリウム活性化ベントナイト粘土利用による下水中の非イオン界面活性剤の除去回収の研究
2013年	チリ	南極にある低温でも活性化する細菌による石油系の海洋汚染の除去
2014年	カナダ	水への廃棄物：新しい砂濾過法によるナフテン酸の生分解
2015年	アメリカ	重金属除去における新しい再生可能フィルター
2016年	タイ	天然の革新的な水貯留の模倣プロメリア(エクメア・アキュレトセパラ)
2017年	アメリカ	赤痢菌、大腸菌、サルモネラ菌、コレラ菌で汚染された水の迅速で繊細な検知と浄化のための新しいアプローチ
2018年	シンガポール	ドリアンの皮とサトウキビの搾りかすから合成した環境に優しく新しい水ろ過用還元性グラフェン酸化物(rGO)について

# 第21回 日本水大賞



表彰式・受賞活動発表会  
2019年6月25日(火)  
日本科学未来館

## 協 賛

株式会社建設技術研究所  
株式会社東京建設コンサルタント

日本工営株式会社  
パシフィックコンサルタンツ株式会社

いであ株式会社  
「川の日」実行委員会 (順不同)

## 後 援

水循環政策本部  
外務省  
文部科学省  
厚生労働省  
農林水産省  
経済産業省  
環境省  
公益財団法人 河川財団  
公益社団法人 環境科学会  
一般社団法人 日本経済団体連合会  
公益社団法人 砂防学会  
一般社団法人 水文・水資源学会  
公益財団法人 世界自然保護基金ジャパン  
(WWFジャパン)

全国市町村教育委員会連合会  
全国水防管理団体連合会  
一般社団法人 全国治水砂防協会  
全国都道府県教育委員会連合会  
全国内水面漁業協同組合連合会  
NPO法人 全国水環境交流会  
電気事業連合会  
公益社団法人 土木学会  
公益社団法人 日本河川協会  
公益社団法人 日本下水道協会  
地方共同法人 日本下水道事業団  
一般社団法人 日本工業用水協会  
公益社団法人 日本港湾協会  
公益財団法人 日本自然保護協会

公益社団法人 日本水道協会  
日本生活協同組合連合会  
一般財団法人 日本ダム協会  
公益社団法人 日本地下水学会  
公益社団法人 日本水環境学会  
公益財団法人 日本野鳥の会  
日本陸水学会  
一般社団法人 日本森林学会  
公益社団法人 農業農村工学会  
一般社団法人 地域環境資源センター  
独立行政法人 水資源機構  
読売新聞社  
独立行政法人 国際協力機構  
スウェーデン大使館 (順不同)

## 主 催

日本水大賞委員会

国土交通省

お問い合わせ

日本水大賞委員会事務局 公益社団法人日本河川協会  
〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-5 麹町E.C.Kビル3F  
TEL:03-3238-9771 / FAX:03-3288-2426 /  
URL:<http://www.japanriver.or.jp/taisyo/>



河川 公益財団法人河川財団による  
基金 河川基金の助成を受けています。